
女王キリエ

カイリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女王キリエ

【Nコード】

N3391Z

【作者名】

カイリ

【あらすじ】

修道女として育てられた孤児キリエ。ある日キリエの元にジュビリーと名乗る黒衣の伯爵が現れる。彼は、キリエが崩御した国王の庶子であると告げ、王位を継承させるために王都へ連れてゆく。しかし、王宮に到着したキリエたちを、彼女の異母兄レノックスの軍勢が襲う。ジュビリーによってその場を脱したキリエは、教会へ帰ると言い出すが、彼は思わぬ告白をする。

「国王には嫡男がいたが死んだ。私が殺したのだ。おまえを女王にするために」

異母兄弟たちとの死闘。隣国の侵攻。異国の王太子との出会い。大陸の覇者との対峙。
キリエは、数奇な運命に翻弄されながらも、王位を目指す。

第1章「ロンディニウム教会の修道女」第1話

息を弾ませながら、少女は古い石段を上がっていった。

修道女特有の頭布^{ウィンブル}を被り、質素な黒いローブをたくしあげ、一段一段上がってゆく。ようやく最上階まで上がると、そこには青い帳が降りかけた夏の夕空が広がっていた。見下ろすと広大な農地が広がり、仕事に勤しむ農夫たちの姿がちらほらと見受けられる。もっと遠くに目を移すと、ところどころ黒々とした森が広がっている。

少女は、おもむろに鐘から伸びている紐を手にとると力いっぱい引っ張る。殷々とした鐘の音が鳴り渡り、帰り支度をしていた農夫たちが作業の手を休め、祈りを捧げ始めた。少女も両手を胸で合わせ、一心に祈りの言葉を呟く。やがて顔を上げると、再び外を眺める。

彼女は、この鐘楼で鐘を鳴らすのが大好きだった。教会から出たことがない少女にとって、唯一広い世界を眺めることができるのが、この鐘楼だったのだ。もっとも、信仰の世界で生きることには喜びと誇りを持つ彼女にとって、外の世界は憧れを持つと同時に恐怖を感じる世界でもあった。

少女は　まだ十三か十四ほどの年頃　、鐘楼の窓辺に手をついてわずかに身を乗り出した。大きなアーモンド型の瞳が興味深そうに農夫たちの動きを追う。彼らとは親交があった。農作物や生活必需品を教会に運んでくるのだ。彼らは朗らかで、自分の知らない世界の話をよくしてくれた。そして同時に、生活の苦しさや、今起こっている戦争についての不安も漏らしていった。

神聖暦一四九三年六月。アングル王国。

プレシას大陸の西に位置する島国アングルは今、大陸の王国ガリアの内戦に参戦していた。ガリア王リシャルに対し、嫡男である王太子ギョームが反旗を翻したのだ。リシャル王は亡妻の兄であるアングル王エドガーに救援を要請し、それに応じたエドガーは

庶子であるルール公レノックス・ハートを派遣した。

冷血公の異名を取るレノックスの数々の残虐行為はこの地にも伝えられていた。普段から暴力的なこの青年は無類の白兵戦好きであり、異国の戦争に喜び勇んで出陣していったという。この村から数人の若者がガリアに向かったが、それは名を上げるためではなく、出稼ぎも同然であつた。

少女が田園を見渡していると、一頭の馬が畦道を教会に向かって駆けてくる。急を知らせる馬か、かなりの速さだ。やがて馬は教会の中へと入っていった。何があつたのだろう、少女が不安そうに見下ろしていると、

「キリエ！」

鐘楼の下から声が上がる。

「いつまで鐘楼にいるつもりです？」

「はい！」

キリエは慌てて返事をする。と石段を駆け下りる。そこには美しい修道女がひとり佇んでいた。

「食堂の手伝いをしてあげなさい」

「はい！」

キリエが元気の良い返事を返し、食堂へ向かおうとすると、先ほどの馬に乗った若者が急ぎ足で司教の書斎がある建物へ向かう姿があつた。

「ロレイン様……。何かあつたのでしょうか」

キリエの問いかけに、ロレインが顔をしかめる。

「……悪い報せでなければ良いのですが……」

ここはアングル王国グローリア伯領のロンディニウム村。村に入ってくる情報はまず、この教会に伝えられる。アングルがガリアの内戦に参加することが決まった時もここに伝えられ、村の若者たちが次々と戦争へ出かけていったのだ。キリエはその時のことをよく覚えていた。

キリエは孤児だつた。教会付きの司教ボルダーの話では、十四年

前にこの村の近くで拾われ、ここロンディニウム教会に託されという。以来教会から出ることなく、修道女として暮らしている。戦争が長引けば自分のような孤児が増えるだろう。キリエは胸を痛めていた。

教会に持ち込まれた情報が明かされたのは、食事の準備が整った頃だった。

「皆、食事の前に話しておかねばならぬことがある」

陰鬱な表情のボルダー司教が低い声で語り始めた。キリエを初めとする修道女や修道士たちは、黙って司教の言葉に耳を傾けた。

「つい先ほど、王都イングレスから早馬が着いた。……国王陛下、エドガー・オブ・アングル様が、身罷られたそうだ」

その場にいた人々から驚きの声が上がる。エドガー王といえばまだ五四歳だ。

「昨年あたりからお体の調子が思わしくないと耳にしていたが……、まさかあの御歳で身罷られるとは……」

キリエは眉をひそめ、顔を伏せると手を合わせて祈りの文句を呟く。ひとしきり祈りを捧げ、顔を上げると険しい表情をしたロレインの姿が見えた。

国王エドガー・オブ・アングルはあまり人徳に優れていたとは言えない人物であった。数多くの愛妾を囲い込み、王妃であるベル・フォン・ユヴェーレンとは争いが絶えなかった。誇り高い大陸の大國ユヴェーレンの王女であるベルにとっては、愛人に現を抜かす夫に我慢がならず、王宮プレセア宮殿では陰湿な陰謀が常にはびこっていたという。

だが、そんな愚王にも長所はあった。教会や修道院、施薬院などには少なからず援助を行っており、貧困層にはそれなりの人気があった。地方の小さな教会に過ぎないこのロンディニウム教会にも、毎年かなりの援助金が入り込んでいる。

横柄だが陽気なこの王は、よく王都イングレス市内に出かけては薄汚い居酒屋に現れ、人々を驚かせていた。そして、その豪快さと

は裏腹に外交に関してはしたたかな面を併せ持ち、大陸の列強に対してうまく渡り合う技量を兼ね備えていた。現在の戦乱の世にあつて、小さな島国に過ぎないアングルが独立を保つことができるのも、一にかかつてエドガーの手腕の成果であつた。

「どなたが王位を継承されるのかはまだ決まっていないということだが……、今は亡きエドガー王陛下のご冥福を皆で祈ろう」

王位……。

キリエはぼんやりと考えた。あの悪名高い冷血公レノックスはエドガーの庶子だ。まさか、この男が王位に就くなんてことは……。いつにも増して重々しい雰囲気の中で食事が済むと、キリエはいつものように図書室へと向かった。この時間に聖典を読み、自習するのが毎日の日課だ。

「キリエ」

図書室へ向かうキリエにロレインが声をかける。

「今日はもう遅いから休みなさい」

「え、でも……」

「今日のあなたは……、少し疲れているように見えます。明日に疲れを残さぬよう、休みなさい」

キリエはきよとした表情でロレインを見上げた。自分では特に疲れを感じてはいない。だが、日頃から細やかな気配りができるロレインだ。自分の疲労を感じ取ったのだろうか。

「では、お先に休ませていただきます。おやすみなさい、ロレイン様」

「おやすみ、キリエ」

深々と頭を下げ、自室へ向かうキリエをロレインが黙って見送る。

「……ロレイン」

不意に声をかけられ、ロレインがぎくりと振り返る。

「……司教様」

廊下の角から、暗い表情のボルダーがゆっくりと歩み寄る。

「……ついに、この日が来たな」

「……はい」

ロレインが苦しそうな表情で呟く。

「こんなにも早く、この日がやってくるとは思いも寄りませんでした……」

ボルダーも溜め息をつきながら頷く。

「……明日にも迎えが来るだろう」

「準備をしておきます」

「頼む」

ロレインは一礼すると、踵を返した。

翌朝、薪を納めにきた農夫がキリエに愚痴をこぼしていた。

「聞いたかい、王様が亡くなった話」

「ええ、昨夜」

農夫は手際よく薪の束を運びながら顔をしかめる。

「まだ五四だによ。しかも、お世継ぎを決めずに亡くなっちまったんだから、一体これからどうなるんだか。インGRESじゃあ、商人どもが右往左往しているらしいぜ」

「何故？」

不思議そうな表情で聞き返すキリエ。

「そりゃあ、王様に金を貸していた商人たちが少なからずいたってことさ」

「お金のことよりも戦争の方が心配だね。ガリアの内戦から手を引いて下さるのでしょうか」

「どうかなあ」

農夫が頭を掻き篸る。

「ルール公はすぐに帰ってくるだろうな。そうなりや村の若い者も帰ってこられるが、あの冷血公は帰ってこなくてもいいんだがなあ。いつそのこと、ずっとガリアに残ってくれりゃあな」

「リシャル王は残って欲しいだろうな」

馬の世話をしていた修道士が口を挟む。

「そりゃ、内戦がまだ続いてるんだからなあ。アングルの他に援軍を頼める国はないし」

「レオン公国は？」

キリエの言葉に、農夫と修道士が目を丸くする。

「だって、確かリシャル王の弟君のお妃は、レオン公国の姫君ではなかったのですか？ レオン公国からの援軍は望めないのでしょうか」

「驚いたなあ、キリエ」

農夫が陽気に笑い声を上げる。

「そんなこと誰に教えてもらったんだい」

「ロレイン様に色々教えていただいたもの」

キリエが誇らしげに答える。

「他の教会区に移ることがあっても、恥ずかしくないようにって、ちゃんと勉強しているんですから」

「なるほどな」

そう返事を返すものの、農夫は腑に落ちない表情で幼い修道女を見下ろした。他の教会区に移るところか、キリエは普段教会の敷地内から出ることを禁じられている。教会を出るのは、秋の収穫祭の時だけ。他の修道士や修道女は積極的に村で奉仕活動をしているというのに、どういうわけかボルダー司教はこの少女を教会から出たがらなかった。

「しかしな、レオンはガリアの応援には行けないよ。ほら、レオンはエスタドの属国だろう？ エスタドのガルシア王はガリアが大嫌いだからな。宗主であるガルシア王の機嫌を損ねるようなことはしたくないんだろうよ」

「そうそう。ギョーム王太子が、ガルシア王の娘との縁談を断ったからな」

「そんなことが？」

「それでリシャル王が怒ってギョーム王太子をなじって……、で、内戦になったんだろう？ 迷惑な親子喧嘩さ」

親子喧嘩。親の顔も名前も知らないキリエにとっては、血の繋がった親子が国を二分する戦争を引き起こすなど、とても理解できなかった。父親に反逆したギョーム王太子とは、どんな少年なのだろう。

「それで、問題はこのアングルの次の王様さ……。ルール公だけは勘弁してもらいたいもんだ」

農夫や修道士が国の未来をああでもないこうでもないと言い合っているのを、キリエは黙って聞いていた。だが、教会から出たことがない彼女にとっては、どこか遠くの出来事を聞いているようだった。

現在、プレシアス大陸ではこのガリア内戦が最も大きな戦禍を引き起こしているが、戦争が起こっているのはこのガリアだけではない。キリエたちが信奉するヴァイス・クロイツ教の聖都クロイツはユヴェーレン王国の自治都市だったが、分離独立を宣言。その独立を許さないユヴェーレンとの間では五十年越しの戦争が続いている。さらに、ユヴェーレンは隣国カンパニウラ王国にも王位継承に横槍を入れ、戦争状態に突入して十年になる。

大陸にはその他、ポルトウス王国やナッサウ王国、ガリアの属国バーガンディ公国など、小さな国々が寄り集まっている。ここ五十年の間では戦乱が絶えず、長らく平和な時代が訪れていないが、ここへきて大陸の覇権を得ようと台頭してきたのが、大国エスタド王国のガルシア王だった。彼の父、先王カルロスがその土台を築き、息子ガルシアはそれを基盤に一挙に領土を拡大した実績があった。彼はプレシアス大陸の統一を目論み、ヴァイス・クロイツ教最高指導者ムンディ大主教と対立している。

「ああ、そうだ」

不意に、農夫が明るい声でキリエに呼びかける。

「悪いけどキリエ、おまえさんの薬草をまた分けてくれないかな。代わりに、うちで作ったチーズをいくらか持ってきたんだが」

キリエの顔が明るくなった。

「まあ、ありがとう！　どの薬草を持っていけます？」

その頃、教会の門に馬車の一団が到着していた。派手さはないが、明らかに高位の者が使う馬車の到着に、門番たちは困惑して立ち尽くしていた。馬車から一人の青年が降り立つと、恐々と歩み寄ってくる門番に名を名乗る。

「私はジョン・トゥリー子爵。ボルダー司教に目通り願いたい。クレド伯爵ジュビリー・バートランド様がおいでになったと言えば、わかるはずだ」

「クレド伯……？　しょ、少々お待ちを……！」

この村はグローリア伯領に属しているが、クレド伯領といえは隣の領地だ。何故このグローリア伯領に、しかもこんな小さな教会に？　門番たちは不思議に思いながらも慌てて司教に知らせに走った。

「……静かな村ですね」

ジョン・トゥリーは、周りを見渡すと呟いた。後ろからもう一人の男が馬車を降りて歩み寄ってくる。

「……そうだな」

男は三十代半ばほどで、黒髪黒瞳。身にまとっているのも黒い^{ダフ}リット^{リット}衣で、全身黒尽くめに近い。綺麗に整えられた口髭と顎鬚。思慮深そうな顔。鋭い目。どこか近寄りがたい空気を醸し出している。それに対し、ジョン・トゥリーは明るい栗毛に鳶色の瞳。見るからに実直そうな好青年だ。

「クレド伯……！」

二人の背後から、ボルダー司教の緊張した声が投げかけられる。

「こ、こんな所でお待たせして……、申し訳ございません！」

「構わん。教会がみだりに外部の者を入れないことぐらい知っている」

冷たく言い放つジュビリー・バートランドに向かって、ボルダーは改めて深々と頭を下げた。少し遅れてロレインがやってくる。陰しい表情の修道女は、ジュビリーを凝視すると黙って一礼した。

「お早いお着きでしたな……」

ボルダーがジュビリーを中へ案内する。

「明け方にすぐ発った」

「お疲れでございましょう。少し休まれては……」

「時間がない」

「はっ」

一言一言が鋭い棘のように言い放たれ、ボルダーは強張った顔のまま、教会の庭に面した渡り廊下を進んでいく。その時、庭の奥で歓声が上がった。

「キリエ、相変わらずおまえさんの薬草園はすごいな！」

「そんなことないわ。もう少し種類を増やしたいのだけど。どれをお持ちしましょうか」

「ええと、カモミールとサンザシあるかい」

「乾燥させたのがまだたくさんあります。今、持ってきますね」

その様子をジュビリーが黙って眺める。ボルダーはおずおずと声をかけた。

「……あの娘です」

「そのようだな」

じつとキリエを見つめるジュビリー。その目が静かに眇められる。幼い修道女は自分が育てた薬草たちを誇らしげに眺め、明るい笑顔で農夫と談笑している。小柄だが、花のように咲くその笑顔にその場が自然と明るくなるようだった。ボルダーが耳打ちすると、ロレインが前に進み出て声高に呼びかける。

「キリエ！」

「はい！」

「あなたにお客様がいらつしゃっています」

「お、お客様、ですか？」

キリエは困惑の表情を浮かべた。孤児のキリエに訪れる者などいない。畑を出ると渡り廊下までやってくるが、その顔は不安に満ちている。

キリエは、司教の後ろに佇んでいるジュビリーとジョンに視線を投げかけた。ジョンはにつこりと顔をほころばせたが、ジュビリーは冷たい瞳のまま無言で見つめてくる。眉間に皺を寄せた険しい表情の男を、キリエはじつと見上げた。誰だろう。キリエの不安はますます膨れ上がった。ロレインはキリエの服装にちらりと視線を走らせた。

「服を着替えましょう。着替えてから司教様のお部屋へ」

「は、はい」

ロレインはキリエの肩に手を添えると、その場から連れ出した。

「ロレイン様……、あのお方は、どなたですか？」

「……お会いになればわかります」

言葉少なげに答えるロレイン。一体これから何が起こるのか。キリエは突然のことに戸惑いながら自室へ戻る。替えのローブを取り出すが、ロレインがそれを遮る。

「それではなく、こちらに着替えなさい」

「え、でも、それは……」

ロレインが取り出したのは祭礼用の白い衣装だった。これは、教会に高貴な人物が訪れた時にも着用することがあった。

「粗相があつてはなりません」

「は、はい」

祭礼用の衣装を着るということは、あの男性は相当な身分なのだろうか。キリエは黙りこくって着替えを済ませた。

司教の部屋まで来ると、ロレインが扉を静かに叩く。

「お待たせいたしました」

「入りなさい」

ボルダーのしわがれた声が返ってくる。キリエは緊張で喉の渇きを感じながら、恐る恐る部屋へと踏み入った。

部屋の中央にボルダーとジョン。ジュビリーは奥の窓から教会の庭を見下ろしていた。そして、ゆっくりと振り返る。

「……………」

ジュビリーの鋭い目にキリエは思わず息を呑んだ。一八五センチはあるだろうか。小柄なキリエは巨人でも見上げるような表情で彼の顔つきを窺った。

「キリエ、こちらはクレド伯爵ジュビリー・バートランド様。そして、ジョン・トゥリー子爵。……ご挨拶して」

言われるままにキリエは胸の辺りで両手を合わせ、軽く片膝を付いて最敬礼した。

「キリエと申します。天なる神に、お恵みと今日の出会いに感謝いたします……」

そう言って立ち上がろうとした時、キリエは思わず「きゃっ」と悲鳴を上げた。彼女の右手をジュビリーが手に取ると、その場に跪いたのだ。思わず引っ込めようとした指先をジュビリーが握り締める。

「……！」

ジュビリーは上目遣いにキリエを見つめ、ゆっくりと挨拶を述べた。

「……お迎えに上がりました。レディ・キリエ・アッサー」

「はっ……？」

手を握られたまま、キリエが戸惑いながら聞き返す。ジュビリーは目を眇め、怯えた表情の修道女を探るように見つめた。やがてすつと立ち上がると、静かに口を開く。

「今から言うことを良く聞くのだ」

「は、はい」

「私とそなたは遠縁に当たる」

「え……」

キリエは眉をひそめた。

「そなたの母はレディ・ケイナ・アッサー。グローリア伯爵ベネデイクトの令嬢だ」

「え……、ま、待って下さいっ」

キリエが慌てて口を挟む。

「お人違いですつ。私は孤児で、ファミリー・ネームがありません。洗礼名だって、司教様がお付けになったもので、私……」

「ベネディクトが、身分を隠して育てるよう言い含めてここへ預けたのだ。そなたが二歳の時、母であるレディ・ケイナが病死したためだ」

冷たく乾いた声で淀みなく言い放つジュビリーに、キリエは思わず顔を引きつらせて後ずさる。何……？ このお方は……、何故こんなことを言うの……？

「身分を隠す必要があったのだ。そなたの父親は……、昨日身罷られた国王陛下、エドガー・オブ・アングル様だ」

「……は……？」

キリエの両目が大きく見開かれ、思わず背後のロレインを振り返る。が、ロレインは苦しげに目を閉じ、俯いている。

「もちろん、陛下には王妃がいらっしゃる。だから、そなたは庶子ということになる。だが、陛下には嫡子がいらっしゃらない。つまり、そなたはアングル王国の王位継承権を有しているのだ。そなたには、イングレスのプレセア宮殿で王位を宣言する権利が」

「やめてッ！」

「……」

キリエが思わず上げた叫び声にジュビリーは口を閉ざしたが、その表情は微塵も変わらない。

「ひ、ひどいわ……」

キリエはかすれた声で呟き、顔を横に振る。

「私が、世間を知らない修道女だと思って……、そんな、で、でたらめを……。陛下に対する、冒瀆ですッ！」

「キリエ」

ボルダー司教がなだめるように声をかける。ジュビリーはじつと幼い修道女を見下ろし、口を開いた。

「……時間がないのだ、キリエ」

「……」

「今から、この国は大きく揺れ動く。そなたを含めて王位継承権保持者は五人。一人はすでに継承権を放棄しているが、エドガー王は後継者を指名せずに崩御された。王位継承までに国が乱れれば、近隣諸国に付け入る隙を与えることになる」

「で、でも、証拠が……」

「証拠？」

キリエはごくりと唾を飲み込むと、必死に訴えた。

「私が、国王陛下の娘である証拠なんて、何も、ないじゃないですか……。私みたいな修道女に王位継承権なんか、皆が認めるわけがありません！」

「蝶の紋章だ」

キリエの言葉を遮るように、ジュビリーが言い放つ。その瞬間、キリエは言葉を飲み込み、黙り込んだ。そして、見る見るうちに顔から血の気が引いてゆく。

「蝶の紋章をあしらった指輪を持っているはずだ。蝶はアッサー家の紋章。本来アッサー家の紋章は青い蝶だが、そなたが持っているのは赤い蝶のはず。国王はそなたの誕生を祝い、王家の紋章である赤獅子 にちなんで、赤い宝石で蝶をかたどった指輪を作らせた」
「あ、ありません、そんなの……。持っていません！」

明らかにうろたえた表情のキリエが叫ぶ。ジュビリーは辛抱強くキリエを見つめていたが、やがて、傍らに控えているボルダーを見る。
やる。

「……ボルダー」

「……」

ボルダーは眉間に皺を寄せ、沈黙していたが、やがて諦めたように天井を仰ぎ見た。

「……ネックレスにして……。首から下げております」

それを聞くとジュビリーが大股に歩み寄り、キリエは恐怖に顔を引きつらせて後ずさった。

「いや……。来ないで……！」

すると、背後からロレインがキリエの腕を掴む。

「キリエ……」

「ロレイン様……！ 放して……！ お願い……！」

泣きながら懇願するキリエを、ロレインは口を引き結び、目を閉じて必死で抱きすくめた。ロレインにももうどうすることもできない。キリエは絶望して再びジュビリーを見上げた。

「もう一度言うぞ。時間がないのだ」

「……………」

「放棄した一人を除いて、他の者は皆、王位にふさわしい人間ではない。アングルの未来を、闇に閉ざすわけにはいかないのだ」

「で、でも……」

「それからもうひとつ。おまえの祖父、ベネディクトはもう長くない」

「！」

キリエが体をびくつと震わせる。

「十二年間、おまえに会いたくても会えなかった。……おまえに会いたがっている。今会わねば、後悔するのはおまえだ」

「……………」

キリエはうな垂れると深呼吸を繰り返した。頭ががんと割れるように痛い。耳鳴りが響き、気が遠くなりそうだ。しばらく俯いていたキリエだったが、やがてゆっくり顔を上げると、そっと右手を首元に這わせた。指先が鎖を探ると手繰り寄せる。キリエの小さな手に大振りな指輪が現れる。金の台座にルビーの蝶が輝く。ジュビリーの背後に控えたジョン・トゥリーが思わず息を呑む。

「……心配するな」

ジュビリーが低く囁いた。

「おまえの身は、私が守る」

そう言つと、右手を差し出す。キリエはその手をしばらく見つめ、やがて恐る恐る手を取る。部屋を連れ出されようとするキリエに、背後からロレインが名を叫ぶ。

「キリエ！」

振り返ると、ロレインが小走りに駆け寄り、キリエを抱きしめた。

「この日が来なければと、ずっと祈っていました……！」

「ロレイン様……」

では、ロレインは知っていたのか。自分が王の血を引く娘であることを。だが、そんなことはもうどうでもよかった。

「いいですね。良き女王におなりなさい」

女王。その言葉に、キリエはぞくりとした。

「……良いか」

ジュビリーの声に、二人は体を離した。

「……お行きなさい」

ロレインが囁く。キリエは頷くと、ゆっくりジュビリーを振り返った。再びジュビリーはキリエの手を引くと、部屋を出ていった。

「……キリエ……！」

ロレインは顔を覆うとその場に蹲った。その後ろで、相変わらず暗い表情をしたボルダーが無言で立ち尽くしていた。

三人は馬車に乗り込むと、一路グローリアの城に向かった。キリエは緊張に顔を強張らせたまま、黙りこくって馬車に揺られている窓からそつと外を見上げると、住み慣れた教会がどんどん遠ざかってゆく。

しかし、今思えば確かに自分は教会で奇妙な扱い方をされていた。村の中央に位置する教会にしながら、キリエは教会を出て村を訪れることも許されていなかった。年に一度、秋の収穫祭に参加することを許されていただけだ。他の修道士や修道女は、積極的に村に出て奉仕活動をしていたというのに……。それが許されていなかったのは、自分がまだ幼い故だと信じきっていたのだ。それが今、自らの出自を聞かされ、強引に教会から連れ出され、まったく見知らぬ土地へと連れて行かれようとしている。キリエは、孤独と不安で押し潰されそうになった。

「……キリエ様」

キリエの緊張を解こうと、ジョンが優しく声をかける。

「その……、指輪はずっとそうやってネックレスに？」

問われてキリエはおずおずと顔を上げる。

「……司教様が……、私を拾った方がくれたものだと言っ……。

大事に持っていていなさいと……」

「なるほど」

「……まさか、そんな指輪だったなんて……」

泣き出しそうな声でキリエがそう呟き、ジョンは気の毒そうに眉をひそめる。

「大丈夫ですよ。その指輪はこれからあなたの立場を守って下さるものです」

キリエは、ジョンの隣に視線を向けた。黒衣の伯爵は小さな窓から流れゆく風景を見つめている。その表情は相変わらず冷たい。

「グローリア城までもう少し時間がかかります。どうぞ楽になさってください。……ベネディクト様も心待ちにしておられます」

つい先ほど初めて聞いた祖父の名前。今まで天涯孤独だと思っていたキリエは激しく心が乱れていた。ケイナ・アッサー。ベネディクト・アッサー。そして、ジュビリー・バートランド。母親だ、祖父だ、遠縁だと言われても、あまりにも突然のことで理解できない。自分は、一体何者なのだ？

キリエはそつと窓から外を眺めた。木々の間から、遠くに家々がぼんやりと見える。やがてそれらの数が目立ってくる。教会を出て一時間ほど経ったのだろうか。やがて道は幅が広くなり、辺りの雰囲気が変わったことに気づいた。

「着いたぞ」

今まで沈黙していたジュビリーが短く言い放つ。キリエが少し身を乗り出すと、石造りの城が立ちはだかっているのが見える。灰色の堅牢そうな石壁。主塔には青い蝶が描かれた紋章旗がはためいている。

しばらく馬を走らせると、やがて馬車は城門をくぐり、中庭へと入ってゆく。中庭には兵士と思しき男たちや従者たちが大勢忙しく走り回っている。そして、馬車に気づいた者たちが馬車から顔を覗かせている少女を見つけ、口々に何かを言い合っている。ジュビリーはそれに気づくとすぐに窓のカーテンを引いた。キリエは、今までに見たこともない人の多さに再び恐怖心が頭をもたげてきた。

騒がしい中庭を抜けると、ようやく馬車は停まった。ジョンが手を添えて降ろすと、キリエは恐々と辺りを見渡した。ロンディニウム教会など比喩物にならないほど巨大な城が目の前に屹立している。それでも、キリエの恐怖心は頂点に達した。

やがて、塔の門からたつぷりとしたローブをまとった男が、数人の騎士を従えてやってくる。

「ありがとうございます、クレド伯」

ローブの男が一礼する。五十代半ばほどに見えるこの男は、キリエに視線を移すと恭しく跪き、彼女の右手を取る。

「レディ・キリエ。ご無事のご帰還、何よりでございます。グローリア城代家令フランス・レスター男爵にございます」

レスターはしっかりした体格で、灰色の髪。奥まった目から探るようにキリエを見つめてくる。そして、少し感慨にふけるような口調で呟く。

「……大きゅうなれましたな」

「……………」

わずかに首を傾げるキリエに、横からジュビリーが声をかける。

「レスターは、おまえの祖父の腹心だ」

「……おじ様の……………」

「幼い頃のレディ・ケイナにそっくりでございます。ご立派になられましたな」

レスターの口ぶりでは、幼い頃の母を知っているらしい。キリエは目の前で跪く老臣をじっと見つめた。

「ベネディクトは」

ジュビリーが低い声で尋ねると、レスターは顔をしかめた。

「……今夜が山ではないかと」

それを耳にしたキリエは怯えた表情でジョンを振り返る。

「慌てないで、キリエ様。こちらへ」

ジョンがキリエの手を引き、中へ進む。

城の中はひんやりとしており、静まり返っていた。まだ昼過ぎだというのに薄暗く、陰鬱な空気に満ち満ちている。時折侍女たちが黙って急ぎ足で通る。鮮やかな赤い絨毯が広い通路に敷き詰められ、暗い塔の中でぼんやりと浮かび上がる。

壁には甲冑や武器、防具が整然と並べられ、時折城主の家族らしき肖像画が掛けられている。キリエはそれらを見上げながら、歩みを進めていった。

「……義兄上」
あにっえ

ジョンが前をゆくジュビリーにそう呼びかけ、キリエは少なからず驚いた。ファミリーネームが違うが、兄と呼ぶということは……？

「クレドの軍に準備をさせましょうか」

「そうだな」

ジュビリーが呟く。

「明日の朝にはここへ到着させろ」

「はっ」

ジョンが振り返ると、レスターが頷いて踵を返す。その様子を目で追っていたキリエが、立ち止まったジュビリーにぶつかりそうになつて慌てて前に向き直る。

「兄上」

通路の先から若い女性の声が聞こえる。キリエがジュビリーの背から覗き見ると、貴族の令嬢と思しき女性がこちらへ小走りにやってくる。美しい黒髪を綺麗に結い上げ、凜とした端正な顔つきをしている。

「マリーエレン。来ていたのか」

「こちらから使いが参りまして……」

「……悪いのか」

ジュビリーの問いにマリーエレンは固い表情で頷く。そして、キリエに気づくと顔の表情を和らげた。

「レディ・キリエ・アッサーでございますね？」

「あ……、あの」

マリーエレンは跪いてキリエの右手に口を付けると微笑んだ。穏やかな顔つきの女性が現れただけで、キリエの気分はずいぶん落ち着いた。

「マリーエレン・バートランドと申します。ジュビリーの妹にございます」

そして、懐かしそうに囁く。

「……そっくりですね、ケイナ様に」

彼女も母を知っている。キリエは思わずじっとマリーエレンを見つめた。

「お疲れでしょうが、このままベネディクト様のお部屋へ……」

「は、はい」

一行は再び城内を歩き、やがて塔の最奥部へと到着した。

「……」

部屋から医者らしい老人が出てくると、黙って一行を中へ招き入れる。部屋の奥には天蓋付きの寝台が置かれ、そこに数人の従者が佇んでいる。昼の陽光を遮る厚いカーテンから光が一筋部屋に伸びている。寝台には、六十代後半と思しき老人が横たわっていた。従者たちはキリエたちに気がつくと黙って寝台から離れた。

「キリエ様」

マリーエレンがそつと呟き、キリエの手を握った。キリエはマリーエレンの手をぎゅっと握り返し、そつと寝台へと近づいた。

老人はかすかに喘ぎながら呼吸を繰り返していた。灰色の髪が汗で額に張り付き、刻み込まれた深い皺が痛々しい。痩せた顔を取り巻く髭は伸び放題に伸び、細い首に無力に垂れている。

「……ベネディクト様」

マリーエレンが耳元で囁く。

「キリエ様でございますよ。ずっとお会いになりたがっていた……、キリエ様です」

「……………」

ベネディクトはうつすら目を開けた。マリーエレンがキリエの顔を見上げ、キリエはおずおずと顔を祖父に近づけた。

「……おじい様……………」

その小さな声で、ベネディクトの瞳が輝く。何度か瞬きをするとうつくり顔を巡らせ、キリエを見つめる。

「……ケイナ」

ベネディクトの乾いた口から出た言葉は、孫ではなく娘の名前だった。

「……ケイナ……。わしのケイナ……………」

「ベネディクト様……………」ケイナ様ではございません。お孫様の、キリエ様ですよ！」

マリーエレンの呼びかけでベネディクトは顔をしかめ、まじまじとキリエを凝視する。すると、ジュービリーがキリエの背後までやってくると囁いた。

「……ベネディクト。あなたが十二年前、ロンディニウム教会に預けたキリエだ。あなたに会いに来たのだぞ」

「……キリエ……、キリエ、おまえなのか……………」

「おじい様」

キリエは思わずベネディクトの手を両手で握った。やせ細った手は、見た目からは信じられない力で握り返してきた。そして、ベネディクトの目から大粒の涙が溢れ出る。

「キリエ……………」お……………、大きくなったな……………！ 会いたかったぞ

……………！ 許してくれ……………！ おまえには……………、何もしてやれなんだ……………。許してくれ……………！」

キリエは顔を振ると、ベネディクトの首に腕を回すと抱きしめた。初めて会う祖父。これが血の絆なのだろうか。こみ上げてくる懐か

しさに胸が一杯になる。そして、ひたすら許しを請う祖父が哀れでならなかった。

「キリエ……。ケイナは、おまえの母親は、おまえを心から愛していた……。おまえが争いに巻き込まれぬようにと、教会へ預けるようわしに言い遺して死んでいった……。わしは……。でき得る限りおまえを守ろうとした。だが……。それも限界だ」

「……………」

限界。その言葉を耳にしてキリエは顔を上げた。ベネディクトは力のこもった瞳でキリエを見つめた。

「おまえは……。わしの後を継ぐのだ。今からおまえは、このグロリアの領主、グロリア女伯爵だ。……これから先のことは、バートランドと……。レスターに任せてある」

「……伯爵様……………」

「そうだ。彼らは何があってもおまえを守る。わしも……。天からおまえを見守る」

「おじい様！」

ベネディクトの表情が歪む。ぜいぜいと喉を鳴らし、震える声で囁く。

「………… おまえには……。これから過酷な運命が待っている……。だが、決して……。くじけてはならん……。！ おまえのためにも……。アングルのためにも……………」

アングルのために。その言葉がキリエの胸に突き刺さる。やがてベネディクトは呻き声を上げて咳を繰り返し、従者たちが慌てて周りを取り囲む。

「もうこれ以上は……………」

医者も厳しい顔でジュビリーを見上げる。ジュビリーは頷くとマリーエレンに目配せする。

「キリエ様、おじい様を休ませてあげましょう。こちらへ……………」

「ま、待って……。まだ聞きたいことが……………」

マリーエレンが医者を振り返るが、医者は険しい顔つきで頭を振

る。マリーエレンは辛そうにキリエの手を引く。

「待って！ おじい様！」

従者たちが数人がかりでキリエを部屋から連れ出す。

「……………」

喘ぐベネディクトを、ジュビリーが見下ろす。息を整えたベネディクトは顔を歪め、ジュビリーを見つめる。

「……これで、良いのだな……？ 本当に、これで……」

ジュビリーは黙ってベッドの淵に跪き、ベネディクトの顔に耳を近づける。

「これで……、おまえの思い通りになった……。だが、忘れるな……」

……！ キリエは……、キリエは……！」

「わかつている」

ジュビリーが囁く。

「キリエは、私の命がある限り守り続ける。……約束する」

ベネディクトは苦しい表情でジュビリーを凝視するが、やがて頭を再び枕に沈めた。

「マリーエレン様、おじい様は……」

廊下を進みながら、キリエが不安そうに訴える。すると、マリーエレンが真顔で振り返る。

「いけません、キリエ様。あなたはこれから女王になれるお方。私などを敬称で呼んではなりません」

キリエは泣き出しそうな顔つきで立ち尽くした。

「ほ、本当に……、私が女王になれると……？ 本当に、そう思っているのですか？ おかしいわ……。皆どうかしてるわ……！」

「キリエ様……」

マリーエレンは困ったように溜め息をつく。膝を曲げ、視線を合わせる。

「……無理ありませんわ……。十二年の間、何も知らずに教会で過ごしていらっしやっただもの……。でも、アングルは今、あ

なたを必要としているのですよ。アングルの未来は、あなたにかかっています」

「そんなの、知りません……！ 教会に帰らせて……！」

マリーエレンがどうしたものかと困惑していると、背後からジョンが呼びかけてくる。

「マリー様」

「ジョン……」

困りきった表情のマリーエレンと、涙ぐんで顔を強張らせているキリエの顔を交互に見やると、ジョンも眉をひそめて溜息をつく。

「キリエ様……」

「お、おじい様は心配だけど、でも、私、女王になんかなりません……！」

ジョンも腰を屈めるとどこか必死な表情でキリエに言い含める。

「まだキリエ様にはお話していないことがたくさんあります。あなたにご納得いただけるよう、今から義兄上が説明してくれます。ですから……」

あの冷たい表情をした伯爵から何の話があるというのか。キリエは目に涙を溜めたまま俯いた。そこで、マリーエレンがそっとジョンに囁く。

「ジョン、あなたもクレドへ帰るの？」

「ええ、マリー様も一緒にクレドへお帰りになるようにと、義兄上が仰せです。クレドで軍を整え、明日王都へ向かいます。マリー様にはクレド城をお頼みします」

「軍？」

キリエが不安そうに問いかけると、ジョンは笑って答える。

「ご安心ください。イングレスへ攻め込むわけではありませんよ」

「では、ここも城の守りを……」

「そうですね」

二人のやりとりを聞き、キリエは不思議そうな顔で問いかけた。
「……マリーエレン様は……、ジョン様の奥様なのですか？」

「えッ？」

途端に二人がびっくりして振り返り、ジョンが顔を真っ赤にしてまくしたてる。

「ち、違います！ な、何を仰いますっ！」

「だって、マリーエレン様は伯爵様の妹君でしょう……」

ジョンがジュビリーを兄と呼んでいることを指摘するキリエに、マリーエレンが苦笑する。

「違うですよ、キリエ様」

そして、少しだけ寂しげな表情で続けた。

「ジョンは……、兄の亡くなった妻、エレオノール様の弟なのです」
「えっ……？」

思いも寄らなかった言葉に、キリエは思わず絶句する。あの伯爵に、妻が。もちろんあり得ない話ではないのだが、ずいぶん意外な感じがした。しかも、すでに亡くなっているとは。

「……もう八年も前のことです」

少し遠くを見るような目つきでジョンが呟いた。ほんの少しの間、思い出に浸るような表情を見せるが、すぐにまた笑顔を見せる。

「それより、キリエ様。私のことはどうぞジョンとお呼び下さい。私など、田舎の子爵に過ぎません。もちろん、キリエ様が女王に即位されてからも、ずっとお仕えする所存です」

「でも……」

「そうですよ。あなたは女王になられるお方なのですから」

マリーエレンも先ほどのことを繰り返した。

「私のことはマリーとお呼び下さい。今からクレドへ帰らねばなりません、キリエ様の身の回りのことはこれから私が全てお引き受けいたします」

キリエは恐る恐る二人の顔を見比べた。ジュビリーと違って穏やかで柔らかな表情の二人に見つめられ、キリエは小さく頷く。そして深々と頭を下げ、どもりながら囁く。

「よろしく願います。……ジョン、マリー」

ジョンとマリーは顔を見合わせ、微笑んだ。

何とか気を落ち着かせたキリエを部屋へ連れて行く途中、マリー・エレンが不意に足を止めた。壁に掲げられた一枚の肖像画を見上げるとキリエに指し示す。

「キリエ様。このお方があなたの母君、レディ・ケイナ・アッサーですよ」

「えっ」

言われて慌てて見上げる。そこには、上品な深いワイン色のガウンをまとい、ブーケを手にした若い女性が描かれていた。わずかに切れ長な瞳。微笑が浮かぶ唇。キリエと同じ、濃い栗毛。病弱にも見える、雪のように白い肌。確かに、キリエにもその面影がある。

これが、自分の母親……。今まで想像もできなかった母の姿。それが突然、こんな形で会おうとは。高名な画家の手によるものなのか、格調高い気品ある画風にキリエは思わず息をひそめて見つめた。

「……二五歳でお亡くなりになりました。キリエ様は、まだ二歳でいらっしやいました」

二五……。キリエは思わず息を呑んだ。そんな年齢で、この世と別れを告げたのか。まだ幼すぎる娘を遺しての旅発ちは、どんなにか辛かっただろう。

「……マリーは、母をご存知ですか？」

「はい。お綺麗で……、静かなお方でした。キリエ様はよく似ておいですわ」

上目遣いで母の肖像を見つめるキリエに、マリーがそつと肩に手をかける。

「私たちの領地は隣り合っていたので、よく遊びに来たものです。まるで、お姉様のようによく面倒を見ていただきました。私たちは幼い頃に両親を亡くしていましたから……」

マリーの懐かしさを噛み締める言葉に、キリエは思わず彼女を見上げる。そして、そつと肖像画を振り返る。絵の中の母は、心なしか寂しげに見えた。

夕方にマリーとジョンがクレドへ向かった後、キリエは部屋で夕食を出された。

「おじい様の容態は？」

「残念ですが……、よくありません」

侍女は暗い表情で短く答える。他にも色々聞きたいことがたくさんあったが、暗い表情の侍女にはそれ以上声をかけられず、また、侍女が答えられるかも疑わしかった。黙って食事を口に運んでいると、扉を静かに叩かれる。

「伯爵」

伯爵と聞いてキリエは思わず手が止まる。静かに入ってきたジュビリーは、立ち上がるうとするキリエを手で制する。

「少し外せ」

その一言で侍女は黙って部屋を退出していった。

「明日、夜明けと共にイングレスへ向かう」

相変わらず冷たい表情のまま、ジュビリーが言い放つ。

「クレドとグローリアの軍と共にプレセア宮殿へ入城し、王位の宣言を行う。おまえの出自を確認する作業があるだろうが、問題ないはずだ」

「ま、待って下さい」

キリエが青ざめた顔で口を挟む。

「お、王位の宣言って……、わ、私ですか？」

「おまえがしなくてどうする」

「ほ、本気なのですか。私が、女王になると、本気で考えなのですか？」

口ごもりながら問いかけるキリエに、ジュビリーは辛抱強く、ゆっくりと言い含めた。

「心配するな……。おまえが明日、王位を宣言したとしてもすぐ女王になれるわけではない。戴冠しなければ国民や議会から王位を継承したとは認められない。戴冠権を持っているのは、クロイツのム

ンディ大主教だ。イングレスの聖アルビオン大聖堂で戴冠式を挙げて、初めて女王に即位することができる」

ムンディ大主教。

プレシ阿斯大陸及びアングル島で広く信仰されているヴァイス・クロイツ教の総本山、聖都クロイツの支配者。ムンディ大主教は精神世界における事実上の支配者だ。キリエはまさか大主教の名が出てくるとは予想しておらず、目を見張った。

「……大主教……」

ロンディニウム教会のような田舎の小さな教会にいては、一生拝謁の栄に浴することはないのであろう人物。キリエは、ようやく自分の置かれた状況を理解し始めた。

「まずは王位の宣言を行い、国民と議会から支持を得た後にクロイツへ戴冠を要請することになろう」

「で、でも、私は修道女です！」

我知らず叫ぶキリエ。だが、ジュビリーの冷たい目に射すくめられ、恐れ表情が一段と増す。

「私は……、一生を神に捧げる誓いを……、修道誓願を立てた身です。祖父の後を継いで爵位を相続したり、その上、君主になろうなど……、大主教がお許しになるはずがありません……！」

「……それはどうか」

思わぬ言葉にキリエは眉をひそめる。ジュビリーは腰を屈め、キリエの耳元で囁く。

「ムンディはむしろ、おまえがアングルの君主になることを望むだろうな。プレシ阿斯大陸の強国、エスタドのガルシア王はヴァイス・クロイツ教を蔑ろにし、大陸の覇権を握ろうとしている。ムンディは、ヴァイス・クロイツ教の修道女であるおまえがアングル女王になることでエスタドを牽制できると期待するだろう。ムンディにとって悪い話ではない」

「そんな……」

思わず涙ぐむと、キリエは両手で顔を覆った。自分の信仰の指導

者が、そんな政治的駆け引きを望むなど、認めたくなかった。世界は、自分が予想していたよりももっと醜く、恐ろしいものなのか。

「……キリエ」

ジュビリーが更に言葉を続ける。

「……おまえにとつては受け容れ難いことばかりだろう。だが、時間がないのだ。早くしなければ、ガリアから冷血公が舞い戻る」

冷血公の名を聞いてキリエは体を震わせた。

「奴の悪評はおまえも耳にしているはずだ。あの男が王になれば……、間違いなくこの国は滅びる。それを止めることができるのはおまえだけだ」

「……………」

キリエは恐る恐る顔を上げ、不安に満ちた目をジュビリーに向ける。

「待つて。では、ルール公は、私の……」

ジュビリーは険しい顔で頷く。

「異母兄だ」

一瞬、部屋に冷たい空気が張り詰める。キリエはかすかに体を震わせた。だが、そんな彼女にジュビリーは更に追い討ちをかけた。

「それだけではない。王位継承権を持つ者は他にもいる。レノックス・ハートがガリアで戦っている相手……。王太子ギョーム、彼もだ」

「えっ……………」

「彼はガリア王リシャールと、王妃マーガレットの嫡男だ。マーガレット王妃はエドガー王の妹。つまり、アングルの王位継承権とガリアの王位継承権、どちらも保持している。おまえにとつては、従兄にあたるわけだが」

なんとということだ。キリエは呆然とした。プレシアス大陸の覇権をかけた戦いの渦に、今から自分は身を投じようとしている。だが、それでもまだ、自分のことではないような感覚がどこかにあった。これは、どこか遠い異国の話。自分はその物語を聞いているだけ……

…。

「レノックス・ハートを君主にするわけにはいかん。とは言え、異国の王太子を君主に迎えることも避けねばならん。おまえが女王になれば、アングルが望む未来になる」

ジュビリーはそこまで語り終えると、キリエの疲れきった表情に気づき、そつと肩に手をかける。

「……疲れただろう。食事を済ませたら早く休め」

キリエは無言で頷くが、その瞳は空ろだった。

今日という一日は、自分にはわからないことの連続だった。精神的にも肉体的にも疲れきっている。考えなければならぬことが多いすぎる。そして、考えてもわからないことだらけだ。

ジュビリーの言葉が脳裏に蘇る。彼は自分を女王にすると聞いた。遠縁だとも言った。つまり、自分を女王にして、彼は宰相になるつもりか。ヴァイス・クロイツ教では、十八歳に達して初めて成人と認められる。キリエはこれまで孤児として育てられてきたため誕生日がわからず、聖ロンディニウムの祝祭日である六月十日を誕生日の代わりに祝ってきた。つまり、今月十四歳になったばかりだ。成人までには四年ある。四年もあれば、この国を手中に入れられる。

自分が今まで知らずにいた世界が、自分を中心に動こうとしている。そのことにキリエは怯えながら、疲れを癒すためではなく、現実から逃避したいがために寢床へと就いた。

第1章「ロンディニウム教会の修道女」第2話（前書き）

教会を連れ出されたキリエは祖父と再会を果たす。だが、再会の時はあまりにも短かった。

「キリエ、よいか。決してくじけてはならぬ……！」

第1章「ロンディニウム教会の修道女」第2話

「少ないながら、トゥリーの兵も呼び寄せました。イングレスでは何が待っているかわかりませんかね」

クレド城では、ジョンが普段よりもやや興奮した面持ちでマリー・エレンに話しかけていた。

「王太后は以前から人望のあるお方ではありませんでしたから、宮廷でキリエ様を歓迎する者も多いのではないのでしょうか。とは言え、油断はできませんが」

「そうね……」

マリーの気のない返事にジョンが振り返る。マリーは眉間に皺を寄せ、窓から夜空を見上げている。

「マリー様？」

ジョンの呼びかけに、はっと我に返ったように慌てて振り返る。

「……ごめんなさい」

「……どうなさったのです？」

「……嫌な予感がするわ」

マリーの一言に、ジョンは思わず黙り込んだ。

「今更、もう後に引けないことはわかっているけれど……。明日、イングレスでキリエ様が王位宣言を行ったとして、本当にムンディ大主教は戴冠を認めてくださるのかしら。そして、戴冠できたとしてもその先は……。不安なことばかりだわ」

「……エスタド、ユヴェーレン、クラシャンキ帝国……。大陸の列強は、君主不在のアングルを狙うでしょう。アングルの王位継承権を持つガリアのギョーム王太子の反応も気になります」

ジョンは重々しく息をついた。

「ルール公に対抗できるだけの仲間が必要ですね」

「レスターが色々情報網を張り巡らしているけれど……。時間がないわ」

マリーエレンはちらりと青年に視線を投げた。生真面目な顔つきに不安の色を滲ませ、頭の中で必死に様々な言葉を探しているのが見てとれる。

「……ごめんなさい、ジョン」

「はい？」

「あなたも巻き込んでしまったわ」

その言葉にジョンは顔を強張らせ、居住まいを正した。

「いいえ。私が自ら志願したのですよ。義兄上のためでもあります。が、姉のため……、そして私自身の誇りのためです。マリー様がお心を痛めることはありません」

真っ直ぐに目を見て言い切るジョンに、マリーは寂しげに微笑んだ。

「……ありがとう」

そして再び夜空を見上げ、小さく呟いた。

「もう、あれから八年ね……」

温かい腕に抱かれ、微笑みを浮かべたたくさんの人々にのぞき込まれている。そのうちのひとりが自分を抱き上げ、周りに笑い声が上がった。やがて床に降ろされ、手を引かれると覚束ない足取りでゆっくりと歩む。と、不意に背後から悲鳴とどよめきが起こり、振り返った瞬間、風を切る音が耳を突く。瞬間、視界が暗転した。闇闇のまま、人々の悲鳴と怒号、金属がぶつかり合う音などが続く。不安と恐怖に駆られ、泣き叫ぶ。その時、怒り狂った男の罵声が響いた。

「気でも触れたか！ その娘を殺せッ！」

そこでキリエは目を覚ました。

「……………」

両目を見開き、荒い呼吸を繰り返す。喉元には生暖かい汗が流れている。幼い頃から時々みる夢だ。特に、疲れた時や悩み事がある

時などが多かった。久しぶりにみた悪夢に、キリエは不吉な思いで喉元の汗を拭う。

この夢をみた時、いつも思うことがあった。気が触れた娘とは、一体誰なのか。それが、もしも自分のことを指しているとしたら……。キリエは表現しようがない重苦しい不安と罪悪感で部屋を見渡した。石造りの重々しい雰囲気のある寝室。今まで使ったこともなかった天蓋付きの寝台。上質のシーツに、美しい刺繍の施されたキルトが掛けられている。窓からは青白い月光に照らされた檜の木が黒々と枝葉を伸ばしていた。

夢のせいで寝付けなくなったキリエは、とうとう我慢できなくなつてそつと寝床から抜け出した。静かに扉を開け、暗い廊下に出る。廊下の壁に所々燭台が置かれ、ちらちらと明かりが揺れている。ベネディクトの寝室はどこだったろう。小さな教会から出たことがなかったキリエにとつて、巨大なグローリア城は迷路のような場所ではなかった。暗い廊下を不安げに歩き出してしばらくすると、

「……キリエ……」

誰かに名前を呼ばれたような気がして立ち止まる。

「……誰……？」

「……キリエ」

小さな声がした。そちらを振り返るが誰もいない。キリエは声が出た方へ歩き出した。衣擦れの音がする。

「誰……？」

もう一度呼びかけるが答えがない。キリエは暗い廊下で転ばぬよう、壁伝いに小走りに歩く。

「キリエ……」

女の声だ。誰だ。キリエは恐怖や不安もなく、声を追いかけた。声の主はキリエの歩みを待つかのように時々呼びかけ、衣擦れの音を合図のようにして彼女を導いた。何回か階段を上がり、さすがに息を切らしたキリエは立ち止まって呼吸を整えた。その時、

「キリエ」

「ひっ！」

唐突に名を呼ばれ、短い悲鳴を上げる。

「……は、伯爵様！」

胸が割れんばかりに波打ち、キリエは上ずった声で囁いた。暗がりからジュビリーが足音も立てずに歩み寄る。

「どうした」

「……あ、あの……」

キリエは思わず金縛りにでもあつたように立ち尽くした。ジュビリーは顔をしかめ、わずかに首を傾げる。

「……どうやってここまで来た」

「……」

城内を出歩いたことを咎められたようで、キリエは青くなって黙り込んだ。怯えた表情に気づいたジュビリーは慌てて言い直す。

「眠れなかったのか」

黙ったまま見つめてくるキリエに、ジュビリーは少し穏やかな表情を見せた。遠くの燭台の灯火が、二人の顔をぼんやりと照らす。昼間と違ってキリエは頭布を被っておらず、わずかに波打った濃い栗毛が印象的だった。ジュビリーは目を細め、体を固くしている少女を見つめた。修道女の服を脱いだとしても、身も心もまだ修道女のままだ。その身に王の血が流れていなければ、こんな場所へ来ることもなかったろう。冷え切ったはずの心が、ほんの少し痛む。だが、もう決めたのだ。この娘を女王にすると。

「……おじい様が、心配で……」

小さな声でキリエが訴える。

「……お願いです。おじい様の側にいさせて下さい。あのまま、お別れになるなんてことになれば、私……」

どんどん小さくなっていく声を最後まで聞くと、やおらジュビリーはキリエの手を取ると階段を上がり始めた。

「は、伯爵様？」

その言葉にジュビリーが立ち止まり、鋭い目つきで振り返る。

「これから女王になる者が臣下を敬称で呼んでどうする。おまえはこれから、多くの貴族から臣下の礼を受けるのだぞ」

「で、でも、どう呼べば……」

「バートランド、それが無理ならただ伯爵と呼べ」

そう言い放つジュビリーを、黙って見上げていた時。

「伯爵ッ」

階上から不意に呼びかけられる。二人が振り向くと、そこにレスターが佇んでいる。

「キリエ様もおられるのですか？」

「どうした」

「ベネディクト様が」

「！」

二人が急いで階段を上がると、数人の従者が廊下を慌しく行き交っている。

「おじい様はッ？」

ジュビリーが黙ってキリエの手を引いて急ぎ足で部屋へ向かい、静かに扉を開ける。扉が開く音で、中にいた医師が振り返る。そして、キリエの顔を見ると険しい表情で頭を振る。

「ベネディクトは」

「……………」

医師はジュビリーの問いかけにも答えようとしない。キリエが走って寝台へ近づくと、ベネディクトは喘ぎながら必死で呼吸を繰り返していた。

「おじい様ッ」

ベネディクトの瞼がぴくりと痙攣する。

「おじい様、キリエです。おじい様！」

瞼が瞬きすると、濁った目がゆっくりキリエの顔を見つめる。

「……………」

唇が、キリエの名を呼ぼうとかなすかに動く。キリエは跪き、祖父の口元に耳を近づけた。

「……キリエ……」

「おじい様！」

「こ、幸運を……」

死に臨んでも孫の幸せを願うベネディクトに、キリエの目から涙が溢れる。

これまで、修道女として教会で死者と向き合う日々だった。しかし今、初めて血の繋がる者と出会い、その臨終に立会っている。家族が死ぬということは、こんなにも寂しく、心細く、悲しいものなのか。修道女でありながら、自分が今まで人の悲しみの半分も理解していなかったことを初めて知った。キリエがベネディクトの手を握ると、彼はなおも唇を開いた。

「……頼む……」

「何？ おじい様」

キリエはさらに耳を近づける。ベネディクトは力を振り絞って言葉を発した。

「……彼を……、救ってくれ……」

キリエは両目を見開いた。そして、祖父の顔をまじまじと見つめる。その目には苦痛だけでなく、深い悲しみが見てとれた。

「……救う……？」

ベネディクトはキリエの手をぐっと握りしめ、耳元で必死に囁いた。

「そうだ……、バートランドを……、ジュビリーを、救ってやってくれ……」

ジュビリーを救ってほしい。死に瀕した状態で、何故そんな願いを？ キリエは混乱した。

「おじい様、どうということ？ おじい様……！」

「ベネディクト様……！」

背後にやってきたレスターに目を向け、ベネディクトは苦しげに囁く。

「……レスター……、後を……頼むぞ……」

「……！」

すると、突然ベネディクトが喘ぎ始めた。

「いかん」

医師がキリエを押しつける。

「おじい様！」

「離れて！ レディ・キリエ」

ベネディクトは呻き声を上げ、胸を掻き毟る。

「おじい様！」

「ベネディクト」

キリエの絶叫が空しく響く。ベネディクトはがくがくと痙攣を繰り返すと、やがてがくりと頭を垂れた。室内に、沈黙が広がる。

「……………」

医師が首に手を押し当てると、キリエを振り返る。

「……おじい様？」

「……お亡くなり」

キリエは両手で口元を覆うとその場に座り込んだ。レスターが思わず片手で顔を覆い、口惜しげに呻き声を漏らす。

「ベネディクト様……！」

嗚咽が響く中、ジュビリーは無言でベネディクトの遺体に歩み寄った。しばらく黙ったまま見下ろすと、痩せたその顔に手を這わせ、目を閉じる。何かを、決意するかのように。

翌朝。あのまま眠らずに夜を明かし、一晚中祈りを捧げていたキリエは、ぼんやりとした表情で椅子に腰掛けていた。やがて外から聞こえてくるざわめきではっと我に返る。窓からそつと外を窺うと、城門から軍勢が整然と行進してくる。

「……ジョン様」

武装したジョンが軍馬に跨り、軍を率いている。

「キリエ様」

「！」

不意に名を呼ばれ、飛び上がって振り返る。そこには昨夜の侍女がひっそりと佇んでいた。

「ご出発の準備を。お着替えを用意してございます。衣装部屋へ」

「……はい」

言われるままに部屋を連れ出される。城内は慌しかった。一方ではキリエの出発を準備し、一方ではベネディクトの葬儀の準備に追われている。この異様な雰囲気、キリエの胸は重く締め付けられた。数人の侍女が待機していた衣装部屋で、キリエは今まで見たこともない豪華な衣装を示され、啞然とした。

「わ、私、こんな贅沢な衣装は……」

「今から王都で王位の宣言を行うのですよ。粗末な衣装でプレセア宮殿へ入城すれば、貴族たちから嘲笑されます」

乾いた声でそう諭され、キリエは否応なしに着替えさせられた。

「プレセア宮殿にはまだ王妃、いえ、王太后がいらつしやいますし」

小さく呟く侍女の言葉に、キリエは眉をひそめた。

「……ベル王太后？」

「ええ」

ベル・フォン・ユヴェーレン。崩御したエドガー王の妃だ。王と王妃の争いが絶えなかったという噂は、このロンディニウムにも伝わっていた。教会でも、ボルダーが暗にエドガーとベルのことを引き合いに出し、家庭を円満にすることが幸福につながると説教していたことがあったほどだ。

エドガーとベルの間には嫡男エドワードがいたが、狩りの最中に落馬したことが原因で十歳という幼さで亡くなっている。そのこともあって、次々と庶子を生む愛妾たちに対し、王妃は露骨に敵意を見せていたというから、キリエに対しても好意的なはずがないだろう。キリエは憂鬱そうに溜め息をついた。と、その時、彼女は眉をひそめた。

（王太子……）

父と妃の息子ということは、亡くなったエドワード王太子は自分

の異母兄だ。キリエは不吉な胸騒ぎを感じた。今まで知らされていなかった事実が次々と姿を現してくる。自分は、一体誰なのだ？
これから、どうなるのだ？

不安そうなキリエに構わず、侍女たちは手際よく衣装を着付けてゆく。金欄で縁取られた目にも鮮やかな青いワンピース。幾重にも重ねられた上質なペチコート。今まで触れたこともなかった金銀の装身具。長い栗毛は綺麗に結い上げられた。仕上げに化粧を施すと告げられたが、キリエはそれだけは頑なに拒んだ。長年教会で育ってきたキリエにとって、化粧はどうしても背徳行為にしか思えなかったのだ。装身具すら、彼女は用意されたものの半分ほどしか身につけようとはしなかった。

「失礼」

衣裳部屋の扉の向こうから、レスターが声をかける。

「お着替えは？」

「そろそろ終わります」

「お食事をご用意しております。出発が迫っております故……」
レスターの言葉にキリエは俯いた。

「……食欲がないわ」

「少しでもお召し上がり下さいませ。インGRESまで三時間はかかります」

侍女がぴしゃりとたしなめる。ようやく着替えが終わり、危なっかしい足取りで部屋から出てきたキリエに、レスターが満足げに頷く。が、その顔は一晩で老け込んだようにも見える。

「おお。昨日の修道女姿からは想像もつかないお姿ですな。結構結構」

慣れない衣装にてこずりながら朝食を済ませた後、キリエは城の礼拝堂へ向かった。礼拝堂という名ではあったが、その豪華さは目を見張るものがあつた。手入れの行き届き具合を見る限り、ベネディクトは生前から信仰を大事にしてきたらしい。礼拝堂に安置された棺の中で、盛装されたベネディクトが静かに眠りにについている。

棺の側で跪くと、キリエは両手を合わせた。

「……あなたの御霊が天使に導かれ、雲間に居ます神の下へと、迷うことなく向かわれることを祈ります……」

淀みなく呟く祈りの言葉が、やがて途切れ途切れになる。

「……あなたが残した……、多くの善行が……、神に認められ……、天で祝福されますよう……」

キリエの閉じた瞼から涙が溢れ出す。今まで何度も唱えてきた死者への哀悼の祈り。まさか、血の繋がった者のために唱える日が来ようとは思ってもいなかった。それでも祈りの文句を最後まで詠唱すると、キリエは静かに立ち上がった。ベネディクトの頬にそっと唇を押し当てるとその死に顔を見つめる。

「……おじい様……」

沈黙のベネディクトに、キリエは心の中で呼びかけた。

（伯爵を救うとは、一体どうということなのでしょう。彼を、何から救えば良いのですか）

答えを得られないまま、キリエはベネディクトに別れを告げた。

侍女たちに見送られて礼拝堂を後にすると、レスターが一人佇んでいる。

「キリエ様。……こちらへ」

言葉少なげに呟くとキリエを導く。礼拝堂を出て城の裏手へ回ると、夏の花で彩られた庭園が広がっている。教会の薬草園を思い出したキリエは、思わず胸が詰まった。庭園の色鮮やかな花々は、二人を黙って迎え入れた。

「……キリエ様」

低い声で呼びかけると、レスターはある一角を指し示した。

「こちらが、レディ・ケイナの墓標でございます」

「……！」

キリエは息を呑んで立ち尽くした。石のように固まって動かないキリエに、レスターは寂しげな微笑を浮かべるとそっと肩に手を添える。

「どうぞご挨拶を。ベネディクト様同様、ケイナ様もキリエ様にお会いしたかったです」

キリエは覚束ない足取りでゆっくりと歩み寄った。草むらに隠れるように、母の墓標はひっそりとそこに横たわっていた。冷たく硬い石に、「我が慈愛は祈りと共に」と刻まれている。キリエは静かに跪くと、恐る恐る手を伸ばし、墓標に触れる。

「……お母様……」

口の中でそつと呟いてみる。昨日見かけた母の肖像画が脳裏に蘇ると同時に、キリエの目から涙が溢れ出た。

何故、こんなことになったのだろう……。何故、自分には母の記憶がないのか。何故、自分は母と引き離され、身分を隠され、真実から遠ざけられていたのか。それが、自分の身を守るためといわれ、ても理解できなかった。十四年前に、何があったのだ。

キリエは涙を拭いた。墓標の上の部分に、蝶の紋章が刻まれている。指輪と同じものだ。キリエは右の手のひらに口づけると、そつと墓標に添えた。

「行つてまいります。……母上」

そして、両手を合わせると静かに祈りを捧げる。と、草を踏む靴音が耳に入り、はつと後ろを振り返る。そこには、正装したジュビリーが背後に佇んでいた。相変わらず冷たい表情だが、その目にはどこか同情の色が感じられる。

「……良いか」

「……はい」

キリエは墓標をもう一度振り返ってから立ち上がった。

「キリエ様」

背後からレスターに呼びかけられ、立ち止まる。

「私はここでグローリアとクレドの守備に務めます。ご成功をお祈りしております」

固い表情で頷くと、キリエはジュビリーに促されるまま庭園を後にした。

「私はレノックス・ハートなど認めぬ！」

耳を突く刺々しい叫び声に、廷臣たちは苦勞してうんざりした表情を押し隠す。

「しかし、王太后。早晚ルール公はお戻りになられます。早く次期君主を決めねば、なし崩しのルール公が王位を継承してしまいますぞ」

王太后ベル・フォン・ユヴェーレンは、廷臣が王ではなく、わざわざ君主と呼んだことに目ざとく反応した。

「そなたは王より女王が良いのか？」

「そうではございませんが……」

今度ばかりは不快な表情を隠そうともせず、廷臣は正直に言上した。

「王位継承権を持つ者は男性とは限りませんからな」

「ルール公だけは許さぬ。あの野蛮な獣……。あれがこのプレセア宮殿の玉座に座ると思っただけで虫唾が走る……。国民のためにもならないわ」

「それはそうですが……。そうとなれば他の王位継承権を持った人物に……」

「私の甥はどう？」

「は？」

その場にいた廷臣たちがいぶかしむ。

「ユヴェーレンのエルネスト王子よ。冷血公よりは適任ではないかしら？」

「とんでもない……。！ エドガー王の血を引かぬお方をアングルの君主に迎えるなど……。！ 国民の理解を得られません！」

「それに、ただいまホワイトピークに早馬を遣わしております。ホワイトピーク公にもお伺いを立てねば」

ホワイトピーク公。その名にベルは黙り込んだ。

「公爵は先々代の王、アルバート・オブ・アングル様の庶子のご長

男でいらつしゃいます。傍系と言っても、アングル王家の血脈を受けておいでです」

ベルはその美しい顔を歪めた。アングルの要衝、軍港ホワイトピークを守るホワイトピーク公爵ウィリアム・デーバーは、エドガーの父アルバートが寵愛した庶子サラ・デーバーの長男だった。エドガーにとってサラは腹違いの姉であり、ウィリアムは甥になる。

その時、まるでその頃合いを見計らっていたかのように廷臣が大広間に駆け込んでくる。

「ホワイトピークから使者が帰還しました！」

皆が振り返ると、廷臣は息を整えてから言上する。

「公爵のお言葉をお伝えいたします。『自分はホワイトピークを盾にアングルを守ることが使命である。王位の継承に名乗りを上げることは許されない』」

その言葉に廷臣たちが溜息をつく。

「やはり……」

ウィリアム・デーバーは堅物で生真面目な男として知られており、だからこそ王位に相応しいのでは、という声も上がっていたのである。

「そして」

なおも廷臣が声を上げる。

「こう仰せられました。『エドガー王には嫡子でなくともお子がいらつしゃる。庶子と言えど、先王直系の子孫が王位を継承することが望ましい』と」

大広間が沈黙に包まれ、廷臣たちは戸惑った様子で顔を見合わせた。ベルはひとり、いらいらした様子で口元を歪めている。

「……しかし、陛下のお子となると……」

「やはり、ルール公ということに……」

人々が諦めの表情で溜息をつく。その重苦しい空気を破るように、慌しく数人の侍従が駆け込んでくる。

「申し上げます！」

皆が今度は何事かと顔を上げる。

「先ほどグローリアから使者が参り、現在グローリア女伯がこちらへ向かっているとのことですよ！」

ベルの顔が引きつる。

「グローリア、女伯……？」

その場に居合わせた人々が顔をしかめる。

「グローリア伯はまだご存命のはず。体調を崩されていると聞き及んでいたが……」

その時、ひとりの騎士がはつと顔を上げた。

「……レディ・キリエ・アッサー！」

その名に人々は息を呑んだ。ベルの顔色がさつと青ざめる。

「……キリエ……、アッサー……！」

ベルは顔を歪め、苦々しげに吐き棄てる。

「あの……、あの女の娘か！」

「落ち着いて下さいませ、王太后」

宮廷侍従長、セヴィル伯が侍従に問いたです。

「共の者は？」

「クレド伯が先導しているとのことですよ」

クレド伯という名を耳にして、その場がざわめく。

「クレド伯？ 何故……！」

その疑問に先ほどの騎士が身を乗り出す。

「グローリア伯はかつて、クレド伯の後見人でいらっしやいました故」

「しかし……」

廷臣たちの言い合いに、ベルが玉座を立つ。

「あの妾腹を女王に就ける気か！ もしもそうなれば私はどうなる！ ユヴェーレンに帰れと申すか！」

「レディ・キリエは修道女になられたはず。ご自分から王位を望むとは考えられませぬ。いずれにしろ、彼女の出方を待つしかないかと」

煮え切らない廷臣たちの態度に苛立ったベルは怒りのぶつけようもなく、大広間を飛び出した。

「さて……、どうなるかな」

セヴィル伯が困り果てた様子で呟くと、廷臣たちが彼の周りに集まってくる。

「キリエ・アッサー……。あの幼かった娘が帰ってくるというのか」

「しかし、エドガー王の血を引くことは確かだ。冷血公がアングル王に就くことを考えれば、修道女の方がまだ良いというもの」

「しかし、傀儡には使えませんな」

ひとりが陰険な表情で囁く。

「クレド伯爵……。確か彼はアッサー家と遠縁に当たるはずだ」

「……宰相の座に納まるうというわけか」

一同は重々しく溜め息をついた。

「久しく見かけていなかったが……」

「細君に死なれてからは領地に引き籠もっていたからな」

「モーティマー、そなたはクレド伯と親しかったであろう」

皆の視線を集めたのは、先ほどの若い騎士だった。国王直属秘書官、サー・ロバート・モーティマーだ。

「親しいといえるほどでは……」

彼は口ごもると、緊張した顔つきで付け足した。

「一度、護送任務に同行させていただいただけです」

モーティマーは、野心的な雰囲気であっても、宮廷では決して出しゃばるような人間ではなかったジュービリー・バートランドの姿を思い起こした。その記憶は決して楽しいものではない。だが、それはジュービリーのせいではなかった。

「レディ・キリエ……。国内にいる王位継承権者の中で最も適した人物である以上……、入城を拒む理由はありませんね」

「しかし、ルール公は？」

ひとりがそう問いかけ、セヴィル伯は苦しげに唸った。

「……黙ってはおるまい」

キリエ一行の元にプレセア宮殿の使者が出迎えにきたのは、イングレス郊外に差し掛かった頃だった。沿道で周辺の住民たちが不安そうに遠巻きに見守る中、使者は丁寧な挨拶をもって迎えた。「プレセア宮殿より、レディ・キリエ・アッサーをお迎えに参上いたしました」

「……どなたの命だ？」

下馬し、短く問いかけるジュビリーに対し、使者は複雑な顔をしてみせると、曖昧な答えを返した。

「……宮殿の廷臣は皆、レディ・キリエ・アッサーの入城を歓迎いたしておりますが、歓迎していない者もおります」

「ベル王太后かな」

返事をする代わりに、使者が苦笑する。

「……ご安心下さい。今や王太后の力は無きに等しい状況にございます」

「……先を急ごう」

表情を変えず、ジュビリーはそう言い放つと再び馬に跨った。

それから一時間もしないうちに、一行はイングレスに入った。アングル王国の都イングレスは、プレシアス大陸から切り離された場所であるにも関わらず、巨大な都市の様相を呈していた。十万人近い市民がひしめき合うように暮らし、名実共に文化の中心地であった。

市民で埋まった大通りを隊列が縫うように行進してゆき、物見高いイングレスの市民たちは驚きと不安のこもった目で見守った。市民にとっても、王位継承問題は自分のたちの生活を左右する一大事であった。悪評高い冷血公に比べれば、全くの無名であってもロンディニウム教会の修道女の方が印象は良い。だが、この島国を巡って大陸の列強は虎視眈々と付け入る隙を狙っている。そんな国を背負っていけるのか、その不安も拭いきれなかった。

「……ここが、イングレス……」

初めて見る 都市 にキリエは目を奪われた。村では見ることはない、せめぎあうようにして林立する建物。彩り鮮やかな品々が並ぶ市場。着飾った者たちと、キリエの軍勢など目に入る様子もない物乞いをする者たち。豊かさや貧困、華やかさと醜さが同居する都を、キリエはどう受け止めてよいかわからなかった。

やがて、軍はプレセア宮殿に差し掛かった。プレセア宮殿は市街地を貫くノーヴァ川を堀の代わりにしており、川の上には跳ね橋が架けられている。中庭で近衛兵たちが出迎えのために整列しているのが見える。橋門をくぐったところで、ジュビリーはキリエを馬車から降ろした。

「あッ」

裾を踏みつけて転がり落ちそうになるキリエを、ジュビリーの大きな両手が支える。

「ご、ごめんなさい……」

ジュビリーに抱きかかえられるようにして地に足をつけると、顔を真っ赤にして呟く。

「慣れない衣装だ。気にするな」

言葉とは裏腹な冷たい口調にキリエはぐくりと唾を飲み込む。

「落ち着いたらマリーエレンを呼び寄せる。宮廷には宮廷の儀礼がある」

宮廷儀礼を学ぶ前に王宮へ押しかけるということは、それほど切迫した事態ということなのだろう。確かに、王位継承に一刻の猶予も許されない。

息を整えると、キリエは辺りを見渡した。ぐるりと囲む衛兵たち。その周りにひしめく貴族たち。まるでキリエを呑み込むかのように聳え立つ宮殿。彼女は、足がすくんだ。震えを感じながら思わず背後を振り返ると、門の外では市民らが固唾を飲んで見守っている。

貴族たちは、キリエの不均衡な姿に目を奪われた。目の覚めるような美しい青のドレスをまといながらも、顔にはほとんど化粧を施さず、装身具も申し訳程度しか身につけていない。それでも、幼く

も無垢な瞳を持つ少女に、賞賛の溜め息が零れる。

やがて、歴代君主の紋章旗がはためく導入室間アプローチに通されると、きらびやかな内装にキリエは息を呑んだ。グローリア城と違い、華やかな装飾が施され、まるで異国にでもいるかのような感覚に陥る。豪華な絨毯が広間を覆い尽くし、極彩色のタペストリーに混じって数々の絵画が掛けられている。が、何体もの甲冑が飾られているのを見て、キリエは不安と緊張を感じてドレスの裾をぎゅうと握りしめる。廷臣や貴族たちが遠巻きで固唾を飲んで見守る中、数人の廷臣たちがこちらへやってくる。

「グローリア女伯」

廷臣たちは皆、深々と最敬礼してみせた。ひとりの騎士が前へ進み出ると恭しく跪く。

「プレセア宮殿へようこそいらつしやいました。我々は女伯を歓迎いたします。私は亡きエドガー王の首席秘書官、ロバート・モーティマーと申します」

キリエは恐々と手を合わせると頭を下げる。そんな幼い少女にモーティマーはどこか懐かしげに笑いかけた。そして、首を巡らすとジュビリーに向かって一礼する。

「お久しぶりでございます」

それに対して、ジュビリーはかすかに頷いただけだった。

「では、ご案内します」

モーティマーが先導して歩み始めると、キリエは恐る恐る後に続いた。

その時、前方で突然ざわめきが起こったかと思うと、人だかりがさあっと左右に分かれた。通路の先に、緋色のドレスをまとった黒髪の美女が佇んでいる。並み居る貴族たちよりもっと高貴な人物であることが、キリエにもわかった。では、この女性がベル・フォン・ユヴェーレンか。

ベルは、青白い顔つきでキリエを正面から見据えていた。後ろに控えている女官たちは、いつ王太后が癪癪を起すかと不安げな表情

で見守っている。しばらくその場に立ち尽くしていたベルは、ゆつくりとキリエに向かって歩き出した。キリエも数歩歩み寄ったが、不意にどよめきが起こる。キリエが両手を合わせて片膝を突き、教会式に恭しく最敬礼をしたのだ。貴族や兵士たちのどよめきが続く中、ベルは眉をひそめた。

「キリエ……、キリエ・アッサーと、申します。天なる神に、お恵みと今日の出会いに感謝いたします。……身罷られた国王陛下エドガー・オブ・アングル様の御霊が、神に祝福されますよう……」

「！」
エドガーの名を耳にしてベルはかつと頭に血が上った。が、モイティマーが鋭く振り返り、彼女は息を吐き出すと気を落ち着けた。

「……よう参られた」
かすれた声でそう呟くと、ベルはモイティマーに命令を下す。
「グローリア女伯を丁重にもてなすよう」
「はっ」

それだけ言い放つとベルは踵を返し、女官たちを伴って引き上げた。その様子を見守るジュビリーの口元に冷たい笑みが浮かぶ。キリエがベルに対して最上級の礼を尽くしたことで、キリエの評価は上がったはずだ。廷臣たちは二人の立場が逆転することを理解しただろう。キリエに敗れて何も言わなかったのが幸いした。

（最初の顔見せとしては上出来だ）
ジュビリーは慎重に胸中で呟いた。

第1章「ロンドン・ニウム教会の修道女」第3話（前書き）

祖父との別れを告げると、キリエはジュビリーと共に王都イングレスへ向かった。そこに待ち受けていたのは……。

第1章「ロンディニウム教会の修道女」第3話

キリエたちはまず玉座の間へ通された。寒々しいほど広い空間。

天井を支える、細かい細工が施された列柱。まるで天国のように夢のような世界が描かれた天井画。煌く豪華絢爛な空間に、キリエは息をひそめて圧倒されていたが、大理石の床に敷かれた金色の絨毯の先に鎮座する玉座を目にし、彼女はますます緊張した。

「グローリア女伯、どうぞ楽になさって下さい」

白髪の廷臣がわずかに気の毒そうな表情で声をかける。

「私は宮廷侍従長セヴィル伯爵。先王陛下の御世から宮廷の管理を任されております」

キリエは強張った顔つきを崩さないまま、小さく頷く。セヴィル伯は目を細めて幼い女伯爵を見つめる。

「……お懐かしゅうございます。あんなに幼かったレディ・キリエが、このように慎ましやかで立派な女性にお成りとは……。時が経つのは早うございますな」

自分に記憶はないが、相手は自分を知っている。そんな人々が次々と現れ、戸惑いを隠しきれないキリエは怯えた表情でジュービリーに視線を向けるが、彼は黙って頷くだけだった。

「先王陛下がご存命でしたら、女伯のご成長にお喜びになられたことでしょう」

感慨にふけるセヴィル伯の周りに、廷臣たちが肅々と手に何かを捧げてやってくる。巨大なテーブルに一冊の本が恭しく置かれる。

モーティマーが前へ出ると厳かに申し立てた。

「それでは、始めましょう」

キリエは無言で頷いた。

「一四七九年、レディ・ケイナ・アッサーがエドガー王との御子を懐妊……。出産後、二年間はプレセア宮殿で生活したと記録がございます」

そう言われても、記憶のないキリエは戸惑うばかりだ。

「そして、一四八一年にレディ・ケイナが死去。祖父であるグロリア伯爵が、エドガー王の反対を押し切ってロンディニウム教会へ預けたとされています」

「反対を……、押し切って？」

意外な事実にはキリエが思わず聞き返す。

「陛下はレディ・キリエを大変可愛がっておいででしたから」

モーティマーが控えめに口を挟む。そして、セヴィル伯が声高に呼びかける。

「レディ・キリエ・アッサー。あなたには王家の血縁を示す証拠がありますか？」

皆の視線を一齐に受け、キリエは困惑の表情でジュビリーを振り返る。彼に目で指示を下され、キリエはおずおずと左手を差し上げると、中指にはめた指輪をそつと外した。

「失礼」

モーティマーが指輪を受け取ると、目を眇めて指輪を見つめる。

「……一四七九年。K・Aへ。E・O・Aより」

廷臣たちの口から控えめながらざわめきが零れる。

「あなたがエドガー王の御子であることが確認されました」

廷臣たちが改めて深々と敬礼する。が、キリエは内心呆気にとられていた。こんな簡単な確認で済まされるものなのか？　だが、彼女の思いとは裏腹に、運命の歯車はゆっくりと確実に回ろうとしていた。モーティマーがキリエを玉座に座るよう促す。怯えた目で再びジュビリーを振り返るキリエ。

「……………」

ジュビリーに目で促され、恐る恐る玉座に歩み寄る。重厚な櫛の木で作られた玉座には深いワイン色のビロードが張られ、主を無言で待っていた。キリエがしばらく玉座を凝視していると、傍らにジュビリーが音もなくやってくる。そして、手を添えて座るよう促す。キリエは泣き出しそんな顔つきで椅子に歩み寄ると、ぎこちない動

作で腰掛けた。その様子を、キリエ同様、緊張した面持ちのジョンが見守る。

「……レディ・キリエ・アッサー」

セヴィル伯らが跪き、居心地悪げに座り込んだキリエを見上げる。

「……王位の宣言をいたしますか」

キリエはわずかに視線を上げた。玉座の間の天井には、見事なフレスコ画が描かれている。青空に雲が湧き上がり、神が戴冠式を挙げる王を祝福する様子が描かれている。描かれているのは、現在のアングル王家の始祖ウィリアムだ。五百年続くアングル王家の歴史に、自分のような庶子が記録されて良いものか。キリエは最後まで迷った。だが、昨夜のジュビリーの言葉が蘇る。ベネディクトの顔も脳裏をよぎった。キリエはしばらく目を閉じ、胸の中で神への祈りを唱えると、ゆっくりと目を開けた。

「……王位を、宣言します」

か細い声でキリエが囁き、その場にいた者たちは皆、深々と頭を下げた。

「早速、クロイツのムンディ大主教へ使いを送りましょう」

「その前に」

キリエが遮る。

「国王陛下……、父の、墓前に……」

モーティマーは頷いた。

「畏まりました。ご遺体は聖アルビオン大聖堂の礼拝堂に安置してございます。参りましょう」

立ち上がるうとするキリエに、ジュビリーがそつと手を差し伸べる。その手を取って立ち上がる際、彼はキリエにそつと耳打ちした。「上出来だ」

「……………」

そんなジュビリーを、キリエは黙って上目遣いで見つめる。

いつかは訪れるのが夢だった聖アルビオン大聖堂。アングル王国におけるヴァイス・クロイツ教の総本山であり、国の宗教的中心地

だ。主要な王室行事はほとんどここで行われる。例えば君主の戴冠式や結婚式。様々な歴史の舞台になってきた場所だ。自分がそこへ、こんな形で訪れることになるうとは。

これから先に一体何が待っているのか、不安ばかり膨れ上がる中、モーティマーの先導で玉座を離れた時。突然外からざわめきが上がる。キリエが思わず不安げにジュビリーに寄り添うと、大広間に衛兵がひとり飛び込んでくる。

「申し上げます！ ルール公の使者が謁見を求めて参りました！」

ルール公。その名を耳にした瞬間、その場に緊張が走る。

「ルール公が……、もう帰られたのか？」

「こんな時に……！」

セヴィル伯の切迫した様子の呟きに、キリエの顔から血の気が引く。

「……伯爵……！」

ジュビリーは目を眇め、眉間に深い皺が刻まれる。

「義兄上……！」

ジョンが側へ小走りに駆け寄ると口走る。そんな中、モーティマーは顔色ひとつ変えずに、つかつかと衛兵に歩み寄った。

「追い返せ」

思ってもみない言葉にキリエが息を呑む。

「すでにグローリア女伯が王位を宣言された。不服があるならば使者ではなく、ご本人が入城するよう、言って追い返せ」

「しかし……！」

再び外でどよめきが起ったかと思うと、侍従や衛兵の制止を振り切ってひとりの男が押し入る。

「サー・オリヴァー！」

モーティマーが怒気を込めて名を叫ぶ。

（オリヴァー・ヒューイット……）

ジュビリーは胸の中でその名を呟いた。ルール公レノックス・ハートの腹心だ。レノックスの数々の黒い噂の処理を任されていると言われる、陰険な男だ。

「その様子では」

ヒューイットは鷹揚な調子で声高に言い放った。艶のない黒い髪、いかつい体に、あばたの多い浅黒い顔。彼は奥まった目で並み居る廷臣らを眺め渡した。

「すでに王位宣言を済まされたのかな」

「その通りだ、ヒューイット。グローリア女伯はすでに王位を宣言された。出直して、そなたの主君にお伝えしろ。王位の宣言をされたいならば、御本人がプレセア宮殿に参内するようにと」

モーティマーに言われ、ヒューイットは胡散臭げにキリエの顔をじろりと睨みつける。突然のことにキリエは声も上げられず、ただ怯えた表情で見つめ返すことしかできない。

「あなたがレディ・キリエ・アッサーか」

「その通り」

ジユビリーが一步前へ出る。

「王位継承権者である。礼を尽くせ」

「ふん」

ヒューイットは鼻で笑うとキリエにゆっくりと歩み寄る。

「ルール公にお仕えするオリヴァー・ヒューイットと申します」

跪き、型通りの敬礼はするものの、ヒューイットの狡猾そうな瞳にキリエは思わず顔を強張らせて後ずさる。

「兄君から伝言をお預かりいたしております」

「あ、兄の……？」

ヒューイットは目を細め、口元に笑みを浮かべると言い放った。

「そなたの王位は認めぬ」

その場にいた者たちが一瞬凍りつくが、間髪入れずにモーティマーが怒鳴る。

「口を慎めッ！ ヒューイット！」

「私は主君の言葉をお伝えしているだけですよ、サー・ロバート」
ヒューイットは立ち上がるとキリエを見下ろした。

「あなたは一介の修道女に過ぎない。十二年もの間教会に閉じこも

り、世界を知らぬ幼女にこの国の未来を任せるわけには参らないのですよ。当然、エドガー王の血を引く成年男子であるルール公が君主に相応しい。あなたにルール公の王位を認めていただけるのであれば、公はあなたに公爵位を叙位すると仰せです」

「勝手なことを申すなッ」

ジュビリーが鋭く言い放つ。

「勝手？ そちらこそルール公がお留守の間の勝手極まりない行為ルール公はお怒りでございますよ」

「先王陛下に嫡子がいらっしやらない以上、レディ・キリエにも王位継承権がある。君主には性別や年齢、経験よりも必要なものがあるのではないか？」

「それではまるで、ルール公は君主の器ではない、と仰せのような言い草ですな、クレド伯」

ヒューイットはジュビリーに詰め寄り、傍らのキリエにちらりと視線を移す。

「レディ・キリエ。あなたのような修道女が王位継承で争いを起せば、クロイツのムンディ大主教はお怒りになられるでしょうなあ。

修道女の本分を忘れ、欲に駆られて権力を望めば、大主教はあなたを破門にするかもしれませんぞ」

「！」

破門という言葉にキリエは思わず両手で口を覆う。

「黙れ、ヒューイット！ そなたの主君も今までどれだけ多くの問題を引き起こしてきたか、知らぬわけではあるまい！」

「ルール公が、いつどのような問題を？」

「白々しい……！」

ヒューイットとモータータイマーの言い争いをジュビリーは不審げな目で見守っていた。

（オリヴァー・ヒューイット……。これほど饒舌な奴だったか？）
ジュビリーが知っているヒューイットはいつもレノックスの影に隠れ、不始末の始末をさせられる小心者といった姿だった。

「よく考えてみなされ。レディ・キリエはまだ十四歳にも満たない少女。ガリアやエスタド、ユヴェーレンといった列強が我が国を狙っておりますぞ。不安に駆られた国民が反乱を起こしかねないではありませんか……」

ぺらぺらと調子よくしゃべり続けるヒューイットが、ちらちらと視線を動かすのにジユビリーが気づく。

「それに比べ、ルール公は内戦や外国での戦争でも戦績を上げ、国を背負うに十分な素質をお持ちでございます。レディ・キリエがルール公の王位をお認めになり、協力していただけるのであれば、兄妹仲睦まじく暮らせることができるというもの……。レディ・キリエも、もう鳥籠同然の暮らしに戻りたくはないでしょう？」

そこで、ヒューイットは再び視線を動かした。その目が広間の大時計を捉えていることに気づいたジユビリーは、はっとした。

（まさか……！）

そして、モーティマーに向かって叫ぶ。

「城門を閉めさせるッ！ モーティマー！」

「！」

だが、ヒューイットが手を上げて制すると怒鳴り返す。

「気づくのが遅いですが、クレド伯！ ルール公はすでに市街へ入っておりますよ！」

「！」

叫ぶや否やヒューイットが腰の長剣を抜き放ち、キリエが短い悲鳴を上げる。が、ヒューイットの背後から素早く抜剣したジョンが斬りかかり、ヒューイットは体を仰け反らす。

「義兄上！」

「伯爵ッ！」

金切り声を上げるキリエの手を引っ張ると、ジユビリーが駆け出す。が、外からも人々の怒号や斬り合う音が聞こえてくる。ジユビリーは舌打ちすると剣の柄に手をかけながら壁に寄り添い、外の様子を窺った。ヒューイットと共に入城した使節団だろうか。武装し

た騎士たちが宮殿の衛兵と斬り合いを繰り広げている。大廊下の奥からは女官たちの悲鳴が聞こえてくる。

「ジョン！」

ジュビリーから名を呼ばれると、ジョンはヒューイットと二度三度と刃を打ち合わせ、渾身の力で剣を振り下ろした。

「！」

鈍い音と共にヒューイットの長剣が叩き折られ、ガランと床に転がる。思わず剣の柄を凝視するヒューイットを蹴倒すと、ジョンは身を翻して義兄の元へ馳せ参じた。

「義兄上！」

「クレドへ帰るぞ！ 出直した……！」

さすがに悔しげな表情で口走ると、ジュビリーはキリエを脇に抱えるようにして抱き寄せて走り出した。

「は……、伯爵……！」

腕の中でキリエが消え入りそうな声を出す。

「歯を食いしばれ。舌を噛むなっ」

ジュビリーたちはキリエを中心に一気に大通路を突っ走った。ヒューイットの使節団も元々人数が多いわけではないらしい。入り乱れる侍従や衛兵たちをやり過ごし、宮殿を飛び出すと、ジョンがあつと声を上げる。城門から火の手が見える。よく見ると城門で宮殿の軍が交戦している。

「北門から出るぞ」

「はいッ！」

ジョンたちは待機させていたクレドとグローリアの軍を呼び集め、北門へ誘導する。ジュビリーが馬に跨るとキリエの体を引っ張り上げた。

「今からクレドまで走る。ルール軍を引き離すまで馬から降りんぞ。良いなッ」

「ま、待つて！ 待つて！ 伯爵！ わ、私……！」

キリエが半狂乱で叫ぶが、ジュビリーは指先でキリエの口を塞い

だ。そして顔を近づけて囁く。

「今はこの場を脱することが先決だ！」

そして馬の腹を蹴ると走らせる。

「義兄上！」

後方で軍をまとめるジョンが叫ぶ。振り返るとジョンが顔を歪め、後ろを指差している。目を凝らしてみると、炎と煙で軍勢が見え隠れする中、黄色の紋章旗が翻っているのが見える。黄色の旗に、心臓ハートが描かれた盾が重ねられた絵柄。はためく紋章旗の影から、一人の騎乗の男が現れる。

「……レノックス・ハート……」

ジュビリーの呟きに、キリエがびくつと体を震わせる。甲冑姿の青年は大声で命令を下していたが、やがてこちらに気づくと素早く兜を脱いだ。

（気づかれた）

ジュビリーが舌打ちする。

キリエに似た栗毛に、冷たいアイスグレーの瞳。青年は獲物を見つけた猟犬のような残忍な笑みを浮かべ、馬の腹を蹴った。

ジョンが怒鳴り声を上げ、騎兵たちを巧みに誘導するとレノックスの部隊を即座に包囲する。その場で騎兵による白兵戦が始まるが、一際目立つ長身のレノックスは幅広の長剣で騎士たちを次々と馬から叩き落してゆく。

「逃がさんぞッ！ キリエ・アッサー！」

レノックスの咆哮を耳にしたキリエは全身が栗立った。包囲を突破すると、レノックスは怒涛の勢いでジュビリーに迫る。彼はキリエをぐいと馬の首へと押し倒し、耳元で怒鳴った。

「顔を上げるな！」

返事もできないでいるキリエの耳に、鞘から剣が走る音が飛び込む。

「ひッ……！」

刃物や風を切る音は大嫌いだった。

「おおッ！」

レノックスが叫び声を上げながら長剣を振りかざし、打ちかかる。ジュビリーは馬を巡らしながら剣を打ち流し、返す剣でレノックスの顔をなぎ払う。頬と鼻から鮮血が飛び散り、キリエの衣装に降りかかる。相手は思わず箆手ゴントレットを嵌めた手で顔を覆うが、怒りのこもった目でジュビリーを凝視すると、再び剣を振りかぶる。正確にジュビリーの脳天を目掛けて斬りかかるレノックスだったが、ジュビリーはそのことごとくを打ち返した。そして、頭上で鳴り響く剣戟の音に体を震わせているキリエに気づくと、レノックスはキリエに向けて剣を振りかぶった。その瞬間、ジュビリーは肩に羽織サイコートつていた外衣を引きちぎると投げつけた。

「ッ！」

その隙にジュビリーは手綱を引くとその場を脱した。外衣を叩き落とすがその外衣に馬が足を取られ、一瞬馬が棒立ちになる。

「くそッ！」

レノックスが苛立たしげに喚くと、すでにキリエとジュビリーを乗せた馬は黒煙と土煙にかき消されていた。

「あいつ……、ジュビリー・バートランド……！」

レノックスは齒噛みするとその名を呟く。顔から流れる血が唇を濡らした。

「公爵！」

後ろから慌てふためいたヒューイットの声が投げかけられる。

「お、お怪我は……！」

「この、間抜けがッ！」

レノックスは振り向きざまに腕をヒューイットに叩き込む。ヒューイットは呻き声を上げて馬から転げ落ちた。

「貴様がキリエ・アッサーを殺しておけば、こんなに手がかかることはなかったのだッ！ 愚か者めがッ！」

「も、申し訳ございません……！」

レノックスは荒々しく呼吸を繰り返すとジュビリーたちが逃走し

た方角を睨み、頭を振る。

「腕のない貴様をやったのがわが身の不幸よ。時間がなかったとは言え……」

「……公爵……」

「なんだ」

「王太后を捕らえましたが……」

ヒューイットの言葉に、レノックスはうんざりしたように天を仰ぐ。

「あんな女など打っちゃっておけ！ 殺せばユヴェーレンとの間に軋轢が生じる。生かしておいても何の役にも立たん。どうしようもない女だ！」

「い、いかが計らいましょう」

「ベイズヒル宮殿にでも幽閉しておけ」

インGRES郊外の小さな宮殿の名を挙げ、レノックスはこの話を切り上げた。

「……それにしても」

ようやく落ち着きを取り戻したレノックスが声の調子を落とす。

「あの娘が、本当にキリエ・アッサーか？」

「まだ十四歳に満たないはずです。未だに修道女としての意識が抜け切らないらしく、おどおどした様子でした」

「昨日の今日だ。当然だ」

レノックスは過去に何度かプレセア宮殿でキリエを見かけていた。その時彼はまだ八歳。キリエは二歳になったばかりだった。父の愛妾、ケイナ・アッサーに抱かれていた姿が目には焼きついている。父エドガーはキリエに夢中になり、レディ・ケイナの住む離宮に入り浸り、王宮を留守にすることが多かった。あの時の幼子が、自分を出し抜いて王位を宣言した。レノックスは目を眇め、奥歯を噛み締めた。

すでに、クレドの軍勢はあらかた逃亡し、傷ついた者や命を落とした者たちが地面に無残に転がっている。

「火を消せ。プレセア宮殿を支配下に置かねばならん。クロイツへ使者を送る準備もさせろ」

「はッ」

レノックスは顔の血を拭くと、手のひらを見つめる。精悍で男らしい顔つきは、性格を除けば美青年の内に入るだろう。だが、血に汚れたその顔からは狂気が見え隠れする。

ロンディニウム教会の修道女 など、すぐに葬り去って王位宣言ができるものと考えていたレノックスにとって、キリエを取り逃がしたことは予想外だった。

「……これは、長引くかもしれんな」

レノックスの予測は、決して間違っではないなかった。

無言で馬の首にしがみついたままのキリエを乗せ、ジュビリーは駆け続けた。しばらく軍を走らせていると、供の者が声を上げる。

「伯爵！ あれを！」

前方に目を凝らすと、丘の頂から騎馬の音が響いてくる。皆に緊張が走るが、やがて軍勢が姿を現す。先頭の騎兵が持つ軍旗は 青蝶 だ。

「レスター……」

一斉に安堵の声が上がる。

「伯爵！」

前方で馬を駆っていたレスターが声を張り上げる。

「レスター、よく来てくれたな」

「遅くなりました。ルール公が帰国したとの報せを受け、すぐにグロリアを発ったのですが」

ジュビリーはちらりと後方を見やった。

「ルール軍もすでに追ってきていない。我々を追うよりもプレセア宮殿を手中に入れることを優先したのだろう」

「キリエ様は？」

レスターの言葉に、ジュビリーは震えているキリエの肩に手をか

けた。

「大丈夫か、キリエ」

そう言って体を起こそうとするが、キリエは短く「放して!」と叫ぶ。レスターが一瞬顔をしかめるが、ジュビリーは表情を変えない。

「……馬から降ろして……!」

「降りてどうする」

「教会に帰るのよッ。もう……、こんなの耐えられない……!」

両手で肩を抱き、身を震わせて叫ぶキリエを、ジュビリーは疲れきった表情ながらもじつと見つめる。

「あの人が王になりたいならならせてあげればいいわ……。私には、関係ない……。私が女王になんかなれるわけがない……。! 今までどおり、修道女でいちゃいけないの? どうして、私がこんな目に遭わなければならぬ……。!」

言葉の最後は涙声になってかき消された。レスターは気の毒そうな表情でキリエをただ見つめることしかできなかった。ここまで言われれば、何も言い返す言葉はない。心を閉ざし、一切を拒否するキリエにどう声をかけるのか、レスターは黙ってジュビリーに目を移す。

「……キリエ」

彼は低く呟くと体を屈め、耳元でもう一度呟く。

「よく聞け、キリエ」

「いや……!」

「聞け」

ジュビリーは無理やりキリエの頬を両手で包むと顔を上げさせた。

「やめて、放して……!」

「いいから聞け」

涙と血で汚れたキリエの顔が苦痛に歪む。

「いいか、二度は言わんぞ」

そう前置きすると、ジュビリーは鼻が触れ合うほどに顔を近づけ

た。

「王には嫡子がいたが死んだ。……私が殺したのだ。おまえを女王にするために」

耳鳴りが鳴り響く頭に、その言葉はまるで何の意味も成さない言葉のように漂った。だが、次第にはつきりしてくる頭が徐々にその言葉を理解し始め、キリエの顔から血の気が引いてゆく。

「……今、なんて……」

「二度も言わせるな」

キリエの背に寒気が走る。唇をかすかに震わせ、目の前にいる男を凝視する。すぐ側に控えているレスターが険しい顔で俯く。彼はこの事実を知っているようだ。

「……私の、ために……？」

「そうだ。運命の車輪はすでに回り始めている。とつくの昔にな」

「……どうして……」

ぼんやりと呟くキリエに、ジュビリーはわずかに顔を歪める。

「おまえにとつては、確かに迷惑な話だろう。だが、もう始まったことなのだ。すべてはアングルのためだ」

そう言うと、ジュビリーは両手の力をゆるめた。しばらく二人が見つめ合っていると、殿を務めていたジョンしんがりがやってくる。

「……義兄上……？」

二人のただならぬ様子に息を呑むが、それ以上は口を挟まない。

「……ジョン。引き続き追っ手に警戒しろ」

「はッ」

プレセア宮殿とその周辺は、ようやく戦闘の後片づけを始めていた。傷ついた者たちは兵舎や教会へ運ばれ、怪我の浅い者は死者の埋葬を始めた。そして、内戦の勃発に、皆不安で一杯の表情で宮殿を見守っていた。

すでに王太后ベルをベイズヒル宮殿へ追い払ったレノックスは、治療を終えるとロバート・モーターを呼びつけた。その口調が

ら、キリエの擁立に傾いていたと思われるモーティマーをどう処分するつもりなのか、ヒューイットは高みの見物を決め込んだ。

「キリエ・アッサーを女王に擁立するつもりだったのか？」

レノックスは玉座に足を組んで座り込み、頬杖をついてモーティマーを見下ろした。顔面に巻かれた包帯が手負いの獣のような印象を与えるが、その瞳には獰猛な光をたたえている。

「……私はエドガー王の秘書官です」

目を伏せ、不機嫌そうに答えるモーティマー。若いのになかなか度胸の据わった奴だ、とヒューイットは内心嘲笑った。

「どなたが君主になろうと、それは私の関知しないこと。ですが、秘書官として君主に相応しい王位継承者を正しい手続きで迎えたい。それだけのことです」

「なるほどなるほど。相変わらず生真面目な奴よ」

レノックスはつまらなげに目を閉じ、眉をひそめる。

「……父上もおまえのその堅物ぶりを気に入っていた」

モーティマーは黙って冷血公を見上げた。若い頃から王に可愛がられていた自分をレノックスが目の敵にしていたことぐらい、彼は知っていた。

「私はな、合理主義者だ」

突然、およそ似合わない言葉を言い出したレノックスにモーティマーは口をわずかに歪めた。

「使えるものは使い、使えんものは捨てる。あの女、捨てたいのは山々なんだが……」

王太后ベルのことだ。

「捨てるにしても捨て方に悩むところだ。とりあえずベイズヒル宮殿に幽閉することにした。そこで、おまえには監視係を命じる」

「……私ですか？」

思わず迷惑そうな顔つきをしたモーティマーに、レノックスは満足げな笑みを浮かべる。

「つまらん毎日になりそうだな？」

レノックスの真意を量りかね、モーティマーは黙って射るように凝視する。

「私は合理主義者だと言ったはずだ。おまえは秘書官としてこの宮殿の機能に熟知している。消すには惜しい」

それだけのことが……。秘書官という立場でなければ簡単に殺されていたかもしれない。自分がいつでも消される可能性がある存在だと思い知らされたものの、どこか他人事のような気がしてならなかった。

エドガー王に仕えて十年余り。モーティマーは彼なりに誠心誠意仕えてきたつもりだった。愛妾たちとの愛欲の生活に溺れ、妻への誠意は微塵も感じられず、庶子を溺愛する王。特にレノックスが次々としてかす醜聞に甘い処分を下し続け、国民や議会からの不満を逸らすのに多くの時間と労力を費やされた。しかし、その罪滅ぼしのつもりか、一方では救貧法を発布して貧しい者を保護し、教会や修道院に多額の寄付も行った。それ故に、農民や下層の市民らは王のふしだらさにも寛大だったのだ。

特にモーティマーは幼い頃から側に仕えていたために可愛がられた。そして、身勝手で傍若無人でありながら、王としての技量も兼ね備えていたことを知っていた彼は、王に対して余り悪い印象はなかった。そんな主君を失い、正直誰が王位に就こうがどうでもよかった。王は、死んだのだ。

「監視係では不満か？」

「いえ、別に」

虚ろな表情でモーティマーは頭を下げた。

「……仰せの通りにいたします」

レノックスがプレセア宮殿を手中に入れたその頃。王都イングレス郊外のサーセン聖堂では修道士たちが慌しく行き交い、礼拝にやってきた信徒たちは皆不安げに彼らの様子を見守っていた。

聖堂に隣接する僧坊の一室。ひとりの青年が椅子に腰掛け、数人

の修道士が忙しげに旅支度をしているのを黙って見守っている。否、その目は堅く閉ざされている。気品がある整った顔立ちをしているが、閉ざされた両目には青黒いクマが広がっていた。やがて、部屋の扉を叩かれる。

「司教……！」

どこか切羽詰った呼びかけに、眉をひそめながら修道士が扉を開ける。

「司教……！ イングレスに行つてはなりません！ ルール公がインGRESを支配下に置きました！」

瞬間、人々が絶句する中、司教と呼ばれた青年が目を閉じたまま顔をもたげる。

「……レノックスが？」

「その直前にグローリア女伯が王位宣言をしたのですが、ルール公の軍と衝突し、女伯は敗走したようです」

青年の顔がぴくりと引きつる。

「グローリア、女伯……？」

「……レディ・キリエ・アッサーです」

修道士の言葉に、青年は辛そうに眉間に皺を寄せた。

「……キリエ……」

それから数時間後。キリエたちは疲れきった体を引きずるようにしてクレド城に帰還した。日が長くなつたとはいえ、すでに夕刻に差し掛かっている。

初めて見るクレド城はグローリア城よりももっと大きく、威圧感のある城壁がそびえ立ち、オレンジ色に焼けた太陽を背に、その姿を黒く浮き上がらせていた。クレド城を見上げたキリエは、やがて憂鬱そうに黙りこくって目を伏せ、ジョンの呼びかけにも応じなかった。

今回のインGRES入りに率いられた軍勢は、クレドが擁する兵の三分の一にも満たなかったらしい。多くの兵たちが出迎え、そして周

辺の国境の周りを固めるため、守備隊が出動していく。

「殿、お帰りなさいませ」

クレド城代家令ハーバート・ビュート男爵が緊張した面持ちで出迎えた。

「お怪我は……」

「ない。警戒を怠るな」

「はっ」

「兄上！ キリエ様！」

振り返ると、城門のアーチからマリーエレンが駆け寄ってくる。

「皆様、ご無事ですか」

「キリエを頼む」

「キリエ様、お怪我は？」

マリーが腰を屈め、キリエの髪を優しく撫でる。が、固い表情のキリエはかすかに顔を横に振るだけだった。

「お可愛そうに……。お疲れでしょう。さ、体を清めましょう」

そう言って優しく手を取るとその場から連れ出す。

「ジョン、グローリアとトゥリーにも使いをやれ」

さすがに疲れた声でジユビリーが命令を下す。

「レスター、イングレスへの監視は……」

「斥候を放っております」

「よし」

男たちは重い足取りで城内へ入ると疲れた体に鞭打ち、城主の間に集まる。簡単な食事をワインと共に済ませると、三人はアングルの地図を広げ、これからの対策を練り始めた。

「ルール公がすでにイングレスに入っていたとは……」

「父王の死を聞いたらすぐさま戻ってくるだろうと予想はしていたが、……油断した。考えてみればすでに三日経っているのだ」

「プレセア宮殿はルール公の手に落ちた……。しばらくは、実質的なイングレスの支配者となりますね」

ジユビリーは大きく息を吐くと額を押さえた。事がうまく運ぶと

は思ってもいなかったが、イングレスでレノックスと戦闘に及ぶとは予想していなかった。キリエの精神的な動揺も心配だった。

「宮殿内の様子はいかがでしたか。キリエ様を拒む者たちはおりましたか」

「廷臣たちは歓迎していたよ」

レスターの問いにジョンが答える。

「皆、あの冷血公に比べれば修道女の方が良いに決まっている、といった態度だった。ただ、王太后は不満そうだったな」

「そういえば、王太后は今……？」

「さあな。どうなったか知ったことではない」

思わず本音を漏らすジュビリーだったが、レスターは眉をひそめる。

「しかし、ベル王太后はユヴェーレンのオーギュスト王の姫君。手にかけてとあつては、黙つてはおりますまい」

「レノックスも王太后を殺すほど馬鹿ではあるまい」

「そう願いたいのですが……」

レスターの考え深げな表情に、ジョンまで不安そうな顔つきになる。キリエを盛り立てる一派の中にあつて、最も老練な策士であるレスターを、ジュビリーも頼りにしている。重苦しい空気が流れる中、扉を控えめに叩く音がする。

「……兄上」

「入れ」

扉が静かに開かれ、思い詰めた表情のマリーが顔を覗かせる。

「キリエの様子はどうか」

「それが……」

「どうした」

「お体を清めて、食事をご用意したのですが、一口もお召し上がりにならないのです」

ジョンが思わずジュビリーを振り返る。

「戦場で怖い思いをされたのでしょうか。それにしても、一言も口を

きいては下さらないし……」

ジュビリーは椅子にもたれかかり、足を投げ出して天井を仰ぎ見た。およそジュビリーらしくない投げやりな姿だ。

「……義兄上……」

ジョンに促され、ジュビリーは重い口を開いた。

「……キリエに……、王太子を殺したことを告げた」

「い、いつ……!」

ジョンとマリーが顔を青ざめさせる。

「軍を退却させる時に……、教会へ帰ると言い出して聞かないものだから……」

「しかし……」

「キリエ様はまだ、兄上に対して不信感をお持ちです。そんな状態で王太子の件を持ち出すなど……」

「それなら」

首をもたげ、妹に視線を向ける。

「信頼関係を結んだ後になって真実を聞かされたらどうする。あの娘の性格だと、その方が打ちのめされる」

「それは、そうですが……」

「いずれにしろ、今の状況とキリエ自身の立場をわからせるためには、遅かれ早かれ告げねばならなかった。……確かに、あの場で告げたのが正しかったかどうかは、わからんがな」

ジュビリーの言葉に三人は押し黙った。しばらくするとジュビリーは重い溜め息を吐き出すと、体を起した。

「近い内にレノックスはクロイツに使者を送るだろう。大主教がどんな判断を下すか……。これまでに、行いの悪いレノックスに対して何度も破門をちらつかせてきた大主教だ。まさか戴冠要求を受け入れるとは思わんが」

「クロイツを味方に引き入れなければなりませんね」

「大主教の周辺に人をやります」

「頼む」

男たちの会話を、マリーはひとり不安げな表情で見守っていた。

「何か必要なものがあれば、いつでも仰って下さいませ、レディ・キリエ。外に歩哨を立たせておきます故」

華美な衣装から多少落ち着いたワンピースに着替えたキリエは、強張った表情で頷いた。城主と違って人が良さそうな顔つきをした家令は、誰も寄せ付けない固い表情を崩さないキリエを気の毒そうに見つめてから部屋を退出した。扉が閉まるとキリエはゆっくりと窓辺に歩み寄り、外を眺めた。夕暮れの陽射しがクレド城の城壁を照らし、城壁の周りには静かな町が広がっている。その向こうには見慣れた田園風景が広がる。

外に歩哨を立たされていては、自由に部屋を出ることもできない。キリエは自分の立場を思って戦慄した。戦闘の恐怖もまだ癒えていない。そして、先ほど聞かされたジュビリーの告白。キリエは、まるで悪夢を見ているようだった。

王太子エドワードは、五年前に狩りの最中に落馬が原因で夭折したとされていた。まだ十歳だった。それが落馬ではなく、ジュビリーによる暗殺が真実だったとは。エドワードは自分の異母兄だ。実権を握るつもりで王太子に手をかけ、自分を女王に擁立したとしたら……。

（言うことを聞かない私に業を煮やせば、私も殺すかもしれない）
キリエは胸騒ぎを覚えながら呟いた。

（権力のために人を殺すのであれば、レノックス・ハートと一緒にだわ。私は、どうすればいいの……）

考えていても答えは出ず、キリエはよろよろと窓から離れると部屋を見渡した。壁に、美しい細工が施された地図が飾られている。見るとこのクレド及びグローリア周辺の地図だ。キリエはじつとその地図を見つめ、やがて再び窓を眺める。日が先ほどよりも落ちていく。胸騒ぎが一段と強まる。キリエの脳裏に、オリヴァー・ヒューイットの言葉が響く。

「あなたも、鳥籠同然の暮らしには戻りたくないでしょう」

（鳥籠……）

キリエは呆然と呟く。

「そうだ……。鳥籠に戻れば良い……」

キリエは窓際に駆け寄った。日が落ちる方角を確かめ、地図を仰ぎ見る。外の世界を歩いたことはほとんどないが、今はそんなことを言っている場合ではない。まずは、ここから逃げなくては。キリエは忙しなく呼吸を繰り返し、必死に考えを巡らした。窓から身を乗り出すと、城壁の遥か下の方で農夫たちが荷車を数台率いて城の召使と話をしているのが見える。あれだ。キリエは扉に駆け寄ると拳で力いっぱい叩いた。扉のすぐ外で歩哨に立っていた兵士はびつくりして飛び上がると、慌てて扉を開く。

「いかがでしたかッ」

「や、薬草よ！」

キリエが上ずった声で叫び、歩哨は眉をひそめる。

「早く薬草と水を持ってきて！ でないと、私……、し、死んでしまっわ！」

死ぬと言われて歩哨は慌てた。

「な、何があつたのですかッ」

「いいから早くッ！ 毒消しの薬草を持って来てッ！」

キリエに煽られ、歩哨は慌てふためいてその場を走り去った。その後姿を見送ると、キリエは部屋を飛び出した。

クレド城はグローリア城よりも大きい。キリエは息を潜めて石の廊下を走った。時折、侍女や従者の姿を見かけると、飾られた調度品に隠れるなどしてやり過ごす。最上階から三階ぐらいまで降りたものの、キリエは道に迷ってしまった。不安げにおろおろと周りを見渡していると、どこからか人々の話し声が近付いてくる。慌てたキリエは、手近にあった小部屋の扉を押すと中へ飛び込んだ。すると、

「きゃッ」

そこは急な斜面になっており、キリエは闇の中に転がり落ちていった。

「痛ッ……!!」

壁に体を強打してようやく止まると、キリエは顔を押さえながら立ち上がる。闇の中で壁を探ると取手らしきものがあり、そつと押し開く。さつと光が流れ込み、同時に土や草の香りが鼻をつく。恐る恐る顔を出すと、すぐそこは屋外だった。辺りに警戒しながら出ると背後を振り返る。どうやら緊急用の脱出口だったらしい。キリエは体を低くしながら城壁伝いに駆け出した。そこへ、賑やかな話し声が聞こえてくる。城壁に身を隠しながらそつと様子を窺うと、農夫たちが談笑しながら藁束を庭に放り投げていく姿が見えた。キリエは農夫たちが作業を終えようとしているのを見計らうと、荷馬車に飛び込んだ。中には農具を入れる大きな麻袋が何枚もあり、その中のひとつに潜り込む。

やがて農夫たちは作業を終えると荷馬車につないだ馬に鞭をくれ、城門に向かった。キリエは、息を殺して荷馬車が揺れるのに身を任せた。

国境周辺の警備に抜かりがないか、ジュビリーがレスターと話しながら廊下を歩いていると、マリーエレンの声が響き渡った。

「兄上！ 兄上！」

顔をしかめて振り返ると、妹と兵士が血相を変えて駆け寄ってくる。

「どうした」

「き、キリエ様がッ……!!」

マリーが息を切らして叫ぶ。

「キリエがどうしたッ」

ジュビリーの詰問に兵士が答える。

「さ、先ほど、女伯がただならぬご様子で薬草を持ってくるように仰せられて……、そ、それで慌てて医師の元へ行き、戻ってくると

……、女伯のお姿が……！」

ジュビリーの無表情だった顔に険しい皺が刻まれる。

「この……、馬鹿者がッ！」

思わず握り拳で兵士の顔を殴りつける。呻き声を押し殺してその場にひれ伏す兵士。レスターが真つ青な顔でジュビリーを振り返る。

「い、一体どこへ……！」

「探せ！ 城内をくまなく探せ！ 城の外もだ！」

その場にいた兵士や召使いたたちが慌てて四方へ散る。

「城の外へ出られるでしょうか。まだこの城の内部を熟知していないキリエ様が……」

「手負いの狐は何をしでかすかわからん。最悪な事態は避けねばならん……！」

「はッ！ グローリアにも知らせろ！ 一刻も早くキリエ様を連れ戻すのだ！」

レスターの怒鳴り声が響き渡る。ジュビリーは大きく呼吸を繰り返し、唇を噛み締めた。

「キリエ……、早まるな……。おまえにはまだ、話さなければならぬことがたくさんあるのだ……！」

荷馬車の荷台から、そつと顔を出して外の様子を窺うキリエ。すでに日は落ちかけ、辺りは暗くなり始めていた。やがて、通り過ぎてゆく道の傍らに里程石マイルストーンが見えてくる。キリエは思い切つて荷台から飛び降りた。帰路を急ぐ農夫たちは、荷台からキリエが飛び降りたことにも気づかなかつた。道端に転がり落ちたキリエは、痛みに顔を歪めながら体を起こした。マイルストーンまで歩み寄ると、沈む夕日の最後の光で刻んである文字を読み取る。

西、クレド。東、グローリア。

ロンディニウム村はクレド伯領との境に近いグローリア伯領だ。キリエはごくりと唾を飲み込むと、意を決して夕日を背に歩き始めた。

やがて日は落ちた。キリエは飲まず食わずの状態でひたすら歩き続けた。幸いなことにこの日は満月だった。月明かりは思った以上に足元を照らしてくれる。轍がひどい道をとぼとぼと歩く。左右には寂しげな細い白樺が月光を受けて青白く浮かび上がっている。キリエは俯き、できるだけジュビリーのことは思い返さず、教会で過ごした日々を思い出した。

静かで落ち着いた教会だったが、キリエが成長することに明るさが増していくようだった。教会の人々は皆キリエを可愛がってくれた。今思い起こせば、ロンディニウム教会にはキリエと同じ年頃の子どもはいなかった。そのため、彼女は皆の子どものように大事に育てられた。

幼い頃、大怪我をした時にロレインが処方してくれた薬草で傷が癒えた経験があった。それから薬草に興味を持ち始め、自分の薬草園を作った。手をかければかけるほど質の良い薬草が採れ、キリエは夢中になった。

いつも暗い表情で沈黙しているボルダー司教よりも、キリエは厳しくも優しいロレイン修道女が大好きだった。ロレインはキリエに読み書きや計算だけでなく、アングルはもちろん諸外国の歴史まで教えた。そして、ヴァイス・クロイツ教にとつての公用語であるユヴェーレン語に留まらず、エスタド語やガリア語まで伝授した。キリエは、孤児でありながら四ヶ国語に精通した少女に成長した。

「今思えば」とキリエは胸の中で呟く。あれが彼女なりの英才教育だったのだ。だが、教会を出たあの日、キリエを抱きしめて「この日が来なければ」と呟いたロレイン。彼女にとつてもキリエは娘のような存在だったに違いない。キリエは、胸が締め付けられる思いだった。

もうすぐロンディニウム教会へ、ロレインの元へ帰れる。息が切れながらも気力を振り絞って歩みを進めていたキリエの耳に、不意に馬の嘶きが飛び込む。

「！」

ぎよつとして立ち止まり、周囲を見渡すと、遠くから複数の馬の
だく足の音が響いてくる。狼狽たえたキリエはしばらく立ち尽くし
ていたが、やがて慌てて白樺の根元に身を隠した。

それから数分後、十数メートル前方を数頭の騎馬が駆け抜けていっ
た。武装した兵士なのか、それとも民間人なのかは暗くてよくわか
らない。キリエは息を殺してその様子を見守った。

馬の集団が通り過ぎた後、かなり時間が経ってからキリエは体を起
した。膝ががくがくと震えており、思うように歩けない。キリエは
道の中央に這うように戻ると、顔に涙が流れていることに気づいて
その場にへたり込んだ。汚れた手で顔の涙を拭う。すると、月明か
りで指輪がざらりと光る。思わず左手を見つめると、月光を受けた
赤い蝶が毒々しい血のような光を放っていた。

「……！」

唐突に、背筋が寒くなったキリエはとつさに指輪を外そうとした
が、何故か指輪は指の途中で止まった。キリエは震える指で蝶をそ
っと撫でる。

「……どうして……」

キリエはかすれた声で呟いた。

「どうして、私が、こんな目に……？」

涙がぼろぼろと零れ落ちる。顔を歪め、体を丸めてキリエは突然
自分の身に起きたことを思い返した。

遠縁と名乗る黒衣の伯爵。祖父との出会いと別れ。絢爛豪華な王宮
で行われた王位宣言と、その後の乱闘。キリエには、何が起きてい
るのか、皆が何を望み、自分をどこへ連れていこうとしているのか、
皆目わからなかった。もう嫌だ。もう、あんな所には戻らない！

キリエは顔を拭くと、ゆっくりと立ち上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3391z/>

女王キリエ

2011年12月16日18時57分発行